

**山口総長 年頭の挨拶**

**「理事主催記者懇談会」を開催**

**サステナビリティ・ウィーク2015の開催**

**第18回ソウル大学校・北海道大学ジョイントシンポジウムを開催**



年頭の挨拶

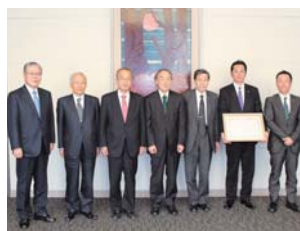
- 1 総長 山口 佳三

全学ニュース

- 3 「理事主催記者懇談会」を開催
- 3 サステナビリティ・ウィーク2015の開催
- 24 第18回ソウル大学校・北海道大学ジョイントシンポジウムを開催
- 34 第1回サステイナブルキャンパス賞2015(大学運営部門)を受賞
- 35 大学入試センター試験の実施
- 36 北大フロンティア基金
- 37 平成27年度補正予算(第1号)案(本学関係分)の主要事項
- 37 平成28年度予算案(本学関係分)の主要事項
- 40 取引先を対象に「調達制度に関する説明会」を開催
- 40 第12回国立大学法人等監事協議会総会の開催
- 41 「平成27年度冬山登山講習会」を開催
- 41 「北海道地区FD・SD推進協議会」総会を開催
- 42 講演会「優秀な留学生の獲得に向けて」を開催
- 42 留学生のための救命講習会を開催
- 43 研究者のためのスキルアップセミナー⑦「読む読まないはタイトルで決まる」を開催
- 44 「学生の学習を促進する少人数演習型授業のためのコースデザインワークショップ」を開催
- 45 「第6回北大発ベンチャー促進懇談会11月例会～クラウドファンディング×ITベンチャー・スタートアップ～」を実施
- 45 第10回アグリビジネス創出フェア in Hokkaidoに出展
- 46 人材育成本部上級人材育成ステーションS-cubicで第27回「赤い糸会&緑の会」を開催

部局ニュース

- 47 北海道大学病院が輔仁大学外国語文学院と部局間交流協定を締結
- 47 医学部医学科の学生がノーベル賞授賞式に出席
- 48 医学研究科寄附講座「がん予防内科学講座」市民医療セミナー及び感謝状贈呈式の開催
- 49 スラブ・ユーラシア研究センター設立60周年記念国際シンポジウム・祝賀会を開催



医学研究科寄附講座「がん予防内科学講座」市民医療セミナー及び感謝状贈呈式



北海道大学病院「第53回ふれあいコンサート クリスマスの夕べ」



サステナビリティ・ウィーク2015



第18回ソウル大学校・北海道大学ジョイントシンポジウム

- 49 薬学研究院・薬学部で特別講演「Nanostructured Biomaterials for Medical and Biological Applications」を開催
- 50 環境科学院で「若手博士人材向けのキャリア形成支援講習会」を開催
- 50 工学研究院工学系技術センター主催セミナー「ウェブサイト制作のキホンとトレンド教えます!」を開催
- 51 低温科学研究所技術部で第21回技術報告会を開催
- 51 北海道大学病院で「第53回ふれあいコンサート クリスマスの夕べ」を実施
- 52 総合博物館がタイ王国科学技術博覧会2015へ企画展示を出展
- 53 「院生・若手研究者のための英語論文執筆セミナー」を開催
- 53 附属図書館で「救命導入(AED)講習会」を開催

博士学位記授与 54

レクリエーション

- 56 方円会が学生囲碁部との交流会を開催  
- 全日本大学囲碁選手権大会の壮行会を兼ねて -

諸会議の開催状況 56

学内規程 57

研修

- 58 平成27年度北海道地区国立大学法人等学生支援担当職員SD研修
- 58 平成27年度法人文書管理・個人情報保護に関する研修会

表敬訪問 59

人事 60

- 62 新任教授紹介

訃報

- 63 名誉教授 木下 晋一 氏
- 63 名誉教授 角皆 静男 氏
- 64 名誉教授 吉田 仁志 氏
- 64 名誉教授 丸川 健三郎 氏



総合博物館 タイ王国科学技術博覧会2015企画展示



院生・若手研究者のための英語論文執筆セミナー

## 年頭の挨拶

北海道大学総長 やまぐち 山口 けいぞう 佳三



新年あけましておめでとうございます。

平成28年の年頭にあたり、北海道大学の教職員、学生・大学院生の皆さん、そして様々な形で北海道大学の活動をご支援くださっている皆さんに、新年のご挨拶を申し上げます。

私達は、今年4月より国立大学法人として、第3期中期目標期間を迎えようとしています。来年度に向けて、昨年末には、平成28年度政府予算案が閣議決定されました。国立大学法人に関わる事項としては、まず、運営費交付金については前年度同額の1兆945億円が確保されました。第1期・第2期中期目標期間を通して実施されてきた一定率の減額は、一旦止まった形となりました。また、科学研究費補助金も前年同額となっています。

しかしながら、第3期中期目標期間では、組織再編などに積極的に取り組む大学に対する運営費交付金のメリハリある配分、機能強化を促すための補助金の改革等を実施するため、次のような適正化・再配分ルールを設定することが謳われています。すなわち、本年度に国立大学の機能強化のために重点配分された308億円に対して、3つの重点支援区分毎に機能強化促進係数（本学の場合には1.6%）を適用して財源を確保し、今後2分の1程度の額を教育研究活動の機能強化のための改革等に取り組む大学に重点配分として、運営費交付金内で再配分する。残りの財源を活用して、新設の補助金として、教育研究活動の機能強化や大学経営の基盤強化を含む組織改革に必要な初期投資費用を支援する、とあります。

さらに、個別大学に通知された予算の内訳を見ますと、第3期に向けた新たな方針が浮かび上がってきます。これまで、文部科学省に概算要求として申請してきた経費は、一括して大学の機能強化経費とされ、各大学の機能強化としての位置づけが問われることになりました。予算提示の内訳も、個別事項ごとの提示ではなく、位置づけごとの予算付けとなっています。これは、第2期中期目標期間に設

けられた改革加速期間から、すでにその方向性が明らかになってきていましたが、もはや個別の部局の将来計画のみでの予算獲得は不可能であり、大学として知恵を出し合うことが問われます。このため、第3期中期目標期間では、大学執行部と各部局との定期的な意見交換の機会を設ける必要があると考えています。それぞれの部局のご協力と積極的な提案をお願いします。

さて、ここで、本学のこの1年の歩みを振り返りたいと思います。まず、研究推進の面では、3月末に、北キャンパスエリアに「フード&メディカルイノベーション国際拠点」が竣工し、その中で「革新的イノベーション創出プログラム（COI STREAM）」に採択された「食と健康の達人」をはじめとした「食と健康」に関する大型産学官協働研究開発が開始されました。これは、本学における産業創出を目標とする産学官協働のモデル事業であります。また、これと呼応して、創成研究機構から分離して、産学・地域協働推進機構を4月1日に立ち上げました。これによって、前者においては先端融合研究を、後者においては産業創出産学協働研究の推進を図る体制としました。そして、この機構を地域との協働を進めるための拠点として、活動を開始しました。立ち上げ2年目となる今年には、より地域に浸透した機構として機能させていきたいと思えます。また、4月1日には、国内外における北極域研究の推進拠点となることを目指して、創成研究機構内に「北極域研究センター」を設置しました。同センターでは、国立極地研究所とJAMSTEC（海洋研究開発機構）との協働体制を構築し、新たな活動資金をも獲得して、今年からは本格的な活動が始まります。

昨年は、文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援（SGU）」事業である「Hokkaidoユニバーサルキャンパス・イニシアチブ」構想の本格始動の年でもありました。このSGU事業において、基本となる4つの教育改革プランについては、今年も着実にその進展を図る必要があります。

まず、最初のプランであるNITOBED教育システムについて

では、新渡戸カレッジが初めての最終学年を迎え、4年間の留学実績等の確実な成果が問われます。今年は、同窓会支援による新たな海外インターンシップも始まりますが、各学部における留学先確保など、学部からの支援も必要となっています。新渡戸スクールの方は2年目に入り、留学生の活躍もありますが、各学院、研究科でのさらなる浸透が必須と思われま。ここでも、各部署のご協力をお願いします。

次に、異分野連携による「国際大学院」群の新設については、医理工学院、国際感染症学院、国際食資源学院の3つの学院が、平成29年度の開設に向けて準備中です。そして、新たな国際連携研究教育局（GI-CoRE）のプラットフォームとして、ソフトマター国際連携研究教育院の設置と、ビッグデータとサイバーセキュリティの分野融合研究拠点設置の予算措置がなされました。SGU事業としては、8つの国際大学院等の設置を目標としています。皆さんからの、さらなる挑戦を待ち望みます。

そして、ラーニング・サテライト、サマー・インスティテュートの展開については、準備段階であるトップコラボ事業の成果の下、今年が本格試行の年となります。各部署の積極的な参加を期待しています。

平成28年度には、これらの活動をより機動的に推進するために、国際連携機構を創設して、創成研究機構、高等教育推進機構、産学・地域協働推進機構と共に、4機構体制を構築し、本学の研究、教育、社会貢献及び国際化の更なる飛躍を図りたいと思います。

ここで、昨年1年間を振り返って、改めて国立大学法人を取り巻く社会に目を転じますと、一昨年12月に出された中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」をめぐっては、昨年1月に文部科学大臣より出された「高大接続改革実行プラン」が高大接続システム改革会議において議論され、「中間まとめ」を経て、今年度末には「最終報告」が策定される予定となっています。「中間まとめ」を受けて、国立大学協会は、「最終報告」に向けての提言を出し、実効性ある改革が実現されるよう、今後の議論・検討に積極的に参画する用意のあることを表明しています。これに対しましても、皆さんの建設的なご意見を頂戴したいと思います。

冒頭にも述べましたが、平成28年度は、第3期中期目標期間の初年度であります。第3期中期目標期間は、国立大学法人にとりまして試練の時、激動の期間であると予想されます。これに対して、本学の全構成員が共に、知恵を出し合って望みたいと思います。皆さんの良き批判・良き知恵を頂けますよう、よろしく願いいたします。

最後になりましたが、平成28年が北海道大学の将来に向けての、さらなる踏み出しの年となることを祈念しますとともに、教職員並びに学生・大学院生の皆さんにとって実り多い年であることを心より願い、新年の挨拶とさせていただきます。

## 新年交礼会の様子

1月4日（月）、山口総長の年頭の挨拶とともに、新年交礼会が始まりました。会場となった百年記念会館大会議室には、役員、部局長等が大勢集まりました。



乾杯の発声をする三上 隆理事・副学長

## ■全学ニュース

### 「理事主催記者懇談会」を開催

12月17日（木）、事務局第一会議室Bにおいて、「理事主催記者懇談会」を開催しました。平成23年度より総長主催の記者懇談会を実施していますが、理事主催の記者懇談会は初めてとなります。

今回は、教育担当である新田孝彦理事・副学長が話題提供を行いました。

冒頭、新田理事・副学長から、本学の教育改革・学生支援に関する取り組みについての説明があり、その後、出席した5名の記者の方々との懇談に移

りました。

記者からは新渡戸カレッジや入試改革、そして、学生募集などについて活発な質問があり、また、意見も寄せられるなど、双方向のコミュニケーションが図られました。

今後も定期的開催予定で、報道機関への積極的な情報発信に努めていきます。

（総務企画部広報課）



記者懇談会の様子

## サステナビリティ・ウィーク2015の開催

### サステナビリティ・ウィーク2015を振り返って



サステナビリティ・ウィーク2015 実行委員長  
国際担当理事・副学長 上田 一郎

持続可能な社会の実現に向けた教育研究の推進週間として2007年に開始した北海道大学サステナビリティ・ウィーク事業は、今年で第9回を迎えました。中核期間である10月24日（土）から11月8日（日）の16日間に12企画が、その前後数週間に20企画が開催されました。国際シンポジウム、市民講座、ワークショップ、展示、企画コンペ、映画上映など、32の多様な企画を通じて持続可能な社会の実現を目指した情報発信、議論、学び、人的ネットワークづくりが行われました。

2014年の開催期間は4ヶ月間におよび、サステナビリティ・マンス（Sustainability Months：サステナビリティ月間）と化していましたが、2015年は新たな企画が加わり開催が8～12月と5ヶ月の長期にわたりました。もはや、サステナビリティ・シーズンと呼ぶ方がふさわしいほど1年の半分は、人類の重要な課題について何かしらの企画を行っている状況となりました。

## 国連：新たな持続可能な開発のための2030アジェンダの採択

2015年9月25日～27日に国際連合では持続可能な開発サミットが開催され、「私たちの世界を転換する：持続可能な開発のための2030年アジェンダ」が193の国連加盟国全会一致で採択されました。この新たなアジェンダは各国に対し、2016年から15年間で17個の持続可能な開発目標（SDGs）の達成に取り組むよう呼びかけると同時に、「あらゆる人の貢献が必要となる」と訴えています。大学そして教職員や学生も例外ではありません。こういった国際社会の要請に応え得る時宜にかなったテーマを今年のサステナビリティ・ウィークは掲げて実施しました。

## 開催テーマ「札幌サステナビリティ宣言2008を再確認する」

「大学が持続可能な社会実現のための原動力になる」という決意を盛り込んだ「札幌サステナビリティ宣言」を改めて認識し直すというのが今年のテーマでした。本宣言は、本学が重要な役割を果たして2008年に札幌で開催したG8大学サミットで、世界の主要な27大学が採択したものです。以来、7年ぶりに日本開催となる2016年5月のG7サミット開催を目前に、持続可能な社会実現のための大学の役割を複数の企画において改めて議論しました。

## 社会と共に教育し、社会と共に研究する大学へ

多数の学長が集まった「北海道－フィンランド・ジョイントシンポジウム」「日本－インドネシア学長会議」では、前者は北極域、後者は当該国における自然環境と社会環境の持続性に、大学は大きな責任を負っていること、そして、その責任を果たす上で大学間や産学間の連携が有益であることが確認されました。

大学が位置する地域社会に焦点を当てた「サステナブルキャンパス国際シンポジウム2015」では、大学のキャンパスというハードとそこで展開される教育研究というソフトを活かすことによって、地域社会の環境負荷低減や新しい社会サービスの開発に貢献し得ること、そのためには自治体、産業界、アカデミアの関係者によるチームが不可欠であるとの認識が共有されました。

「WHO研究協力センター指定記念講演会」「ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ」「同性パートナーシップ制度導入を考える」などの複数の企画では、一人ひとりが健やかに人間らしく生きられる社会を目指して取り組んでいる研究の成果を、市民に向けて発信しました。

これらから分かることは、山口佳三総長のモットーである「社会と共に教育し、社会と共に研究する大学」の姿を追求することこそ、持続可能な社会へと変革を促す原動力となろうとする大学の姿だということです。

## 学生によるイニシアチブ

今年の特徴の一つに、意欲的な学生による新企画が挙げられます。価値あるアイデアを広げる「TEDxHokkaidoU」、社会企業の起業アイデアの国際コンペ「ハルト・プライズ北海道大学予選」など、学生がイニシアチブを発揮して持続可能な社会のあり方を議論する場を形成しました。

他にも、留学生と日本人学生が司会を務めたインターネット・フォーラム「GiFT - Global Issues for Tomorrow」では、YouTube上で世界から267人の大学生や高校生などが参加しました。彼らは、山口総長や研究者からのビデオメッセージに触発され、世界の課題解決に向けた意欲やアイデアをチャットで交換しました。

## 2016年に向けて

サステナビリティ・ウィークは、2016年に10年目という節目を迎えます。これまで、サステナビリティ・ウィーク実行委員会では、Sustainability（持続可能性）という概念を、自然環境、社会環境、経済発展の枠組みにとどまらず、安寧（Well-being）や社会的包摂（social inclusion）を含む広い視野で捉えてきました。国連のSDGsの目標群を眺めれば、我々の視界が世界を先取りしていたことは一目瞭然です。

「北海道大学近未来戦略150」で「世界の課題解決への貢献」を掲げる本学は、この歩みを止めることなく変革の原動力であり続けます。今回は2016年10月22日～11月6日を中心に開催する予定です。2016年5月に開催されるG7サミットなど国際社会の動きとともに地域のニーズも捉え、社会と共に教育、研究していきますので、皆様のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

8月21日（金）～9月25日（金） 会場：工学研究院

**工学研究院公開講座 神秘的な物質～その科学と応用～**

主催：工学研究院／共催：道民カレッジ、いしかり市民カレッジ／実施責任者：工学研究院長 名和豊春

一般市民、高校生、大学生、専門家を対象とした公開講座「神秘的な物質～その科学と応用～」を、8月21日から9月25日までの毎週金曜日午後6時15分～同7時45分にて、計6回にわたり開講しました。

工学研究院では毎年2つの公開講座を開講しており、4月から7月に開講された「廃棄物学特別講義－循環型社会を創る－」に続き、応用理工系学科が主体となり本公開講座を実施しました。参加者は、一般市民の方が60名受講したほか、他大学の学生や社会人の方も多数参加しました。熱心に受講され、講義終了後も質疑応答が活発に交わられました。

自然界にある物質は見方によってとても不思議な性質を持っています。ミ

りよりも小さいメゾの世界やもっと小さいナノの世界における多様性が、様々な工学的価値を生み出し、植物の葉とそっくりな表面を実現することで水をはじくガラス、電気を流す有機物などが出来あがります。この性質を生活にうまく適用したいと、日々研究に励む6名の講師が「生物に学んで新しいガラスを創る」や「細胞の中のプラスチック工場」など、その最前線の研究をカラフルな画像や動画・イラストを用いて、わかりやすく一般市民に説明しました。

工学研究院は、自然界に存在する不思議な物質をうまく利用し、また新しく活用して市民とアイデアを出し合っって持続可能な社会の構築に貢献したいと考えています。



忠永清治教授による講座の様子



大野宗一准教授による講座の様子

9月28日（月） 会場：農学部講堂

**シンポジウム ボルネオの持続可能な土地管理と生物多様性**

主催：サステナビリティ学教育研究センター／共催：農学研究院、環境科学院／実施責任者：サステナビリティ学教育研究センター 准教授 辻 宣行

マレーシアにある国立サバ大学は、本学と交流協定を締結している大学の一つですが、その大学が位置するボルネオ島は生物多様性のホットスポットとして世界的に知られており、サバ大学熱帯生物保全研究所はボルネオにおける生物保全研究の中心です。今年にはサバ大学熱帯生物保全研究所長をはじめ、5名の講師を招いてシンポジウムを開催しました。

サバ大学熱帯生物保全研究所のCharles S. Vairappan所長、サバ州農林局のElizabeth Malangkig氏をお招きし、ボルネオを表す代表的なキーワード「Heart of Borneo (HoB; ハート・オブ・ボルネオ)」についてご講演いただきました。更に、独立行政法人国際協力機構 (JICA) の依田明美氏 (本学卒) に、JICAがコタキナバルで開催している生物多様性保全に関するプロ

ジェクト (SDBEC) を紹介していただきました。また、同じくサバ州で草の根プロジェクトを展開している酪農学園大学の金子正美先生にもご講演いただきました。最後に、農学研究院の大崎 満特任教授より、ボルネオになぜ注目したかについて、参加者と議論しながらまとめが行われました。

今回のシンポジウムを開催できたのは、主催であるサステナビリティ学教育研究センターとJICA、SDBEC、共催の本学農学研究院、環境科学院とサバ大学との、これまで構築してきた深いネットワークによるものです。Vairappan所長は本学で学位をとられており、昨年はサバ大学の学長、エコキャンパスオフィス代表等も来学されました。発表は全て英語で行い、参加者総数は30名程で、うち学外者は10名程でした。



Malangkig氏による講演の様子



会場の様子

10月11日(日) 会場：フード&メディカルイノベーション国際拠点

## TEDxHokkaidoU 2015 Allure of Adventure ~冒険の誘惑~

主催：TEDxHokkaidoU／実施責任者：工学部3年 重井真琴

「Allure of Adventure ~冒険の誘惑~」をテーマに、米国で人気のプレゼンテーションイベント「TED(テッド)」を、TEDxHokkaidoUとして学生が企画・運営し、開催しました。本学から価値あるアイデアを地域や世界に発信することで、叡智の結集による持続可能な社会の実現を目指し、工学部3年の重井真琴さんを中心にアイデ

アをシェアする機会と場を創り上げました。

それぞれ約18分のプレゼンテーションの他に、休憩時間や懇親会を通じて参加者がスピーカーと交流できる機会を設けました。特に休憩時間では、TEDトークに基づくアクティビティなどを行い、参加者同士の交流を楽しんでいただきました。

トーク動画はYouTube上で公開しています。今後も、本学から知的好奇心を刺激するアイデアを発信することで、TEDxHokkaidoUは学生や社会にポジティブな影響を与えていきたいと考えています。

◆<https://goo.gl/rN7Nhv>



トムソン氏による講演の様子



アクティビティの様子



参加者の集合写真

### TEDxHokkaidoU2015 スピーカーとトークタイトル(意識)：

ロバート・トムソン氏(文学研究科/スケートボード単独旅行ギネス記録保持者)

“Stepping Toward Adventure”(冒険に向かう一歩)

エリザベス・タスカー助教(理学部宇宙物理学研究室)

“How Did We Begin?”(私たちはどのように始まったのか?)

松田光希さん(理学部卒業生/非営利団体 日本パルクール協会会長)

“Parkour: Challenging Your Own Fear”(パルクール:己の恐怖心に挑戦すること)

松代弘之氏(工学部卒業生/一般社団法人日本スポーツ雪かき連盟代表理事)

“ピンチをチャンスに!逆転の発想フル活用術”

久保まりなさん(法学部4年/トビタテ!留学Japan1期生)

“Absorption of Ideas”(アイデアの吸収)

山田智久准教授(国際本部留学生センター准教授)

鈴木 章名誉教授(2010年ノーベル化学賞受賞者)

“Choosing the Life of a Researcher”(研究者として生きて)

10月13日(火)~15日(木) 会場：フロンティア応用科学研究棟

## 触媒科学研究所 国際シンポジウム

主催：触媒科学研究所／共催：触媒学会、日本化学会北海道支部、北海道大学フロンティア化学教育研究センター／  
実施責任者：触媒科学研究所長 教授 朝倉清高

平成27年10月、触媒化学研究センターは他分野との国際的共同利用・研究を目的に、「触媒科学研究所」に改組しました。その改組を記念して国内・海外から第一線で活躍する著名な

研究者を招聘し、国際シンポジウム「Global Collaboration in Catalysis Science toward Sustainable Society(サステナブル社会実現へ向けた触媒科学の国際的共同研究)」を開催しま

した。

初日の10月13日(火)には、ドイツのフリッツ・ハーバー研究所のHans-Joachim Freund教授より不均一触媒の原子レベルでの理解について、



京都大学の諸熊奎治教授より理論とコンピュータによる触媒反応の理解について、また、東京大学の堂免一成教授より太陽光水素製造のための光触媒シートの発展について、基調講演がありました。14日（水）と15日（木）には、海外（米国3名、中国4名）と国内（10名）の研究者による招待講演、また触媒科学研究所の研究者（10名）による一般講演がありました。

14日（水）にはポスターセッションも行われ、41件の発表がありました。サステナブル社会に向けての革新的触

媒開発に関して意見交換が活発になされ、新たな国際的共同研究への発展も期待されました。

また、本シンポジウムは、総合化学



基調講演の様子

院の授業である「総合化学特別研究第二」と「化学研究先端講義」の一環としても開催され、多くの大学院生が聴講に来ていました。



ポスターセッションの様子

10月15日（木） 会場：遠友学舎

## 北方圏のまちづくり・エネルギー・木造建築に関する国際シンポジウム

主催：工学研究院建築環境学研究室・建築史意匠学研究室／共催：アールト大学（フィンランド）／  
後援：日本建築学会北海道支部、空気調和・衛生工学会北海道支部、北海道フィンランド協会／  
実施責任者：工学研究院建築環境学研究室 准教授 森 太郎

国際交流協定校であるフィンランドのアールト大学と、技術系の研究機関であるVTT（技術研究センター）から4人の研究者を招いて国際シンポジウムを行いました。基調講演は、藤女子大学の三宅理一教授にお願いし、北方圏のまちづくり・エネルギー・木造建築に関する話題提供と情報交換を行いました。

本シンポジウムの端緒となったのは2014年3月のアールト大学との交流行事です。その後、ラップランド大学でのワークショップ、KINNO（フィンランド、コウボラ市）におけるSustainable Regional Development Seminar（持続可能なまちづくりに関するセミナー）

を実施しました。フィンランドと北海道の共通課題や解決策に影響を与える文化的相違について議論しましたが、北海道の実態を見ていただいた上での議論の発展が必要と考え、今回のシンポジウムを開催する運びとなりました。

北海道とフィンランドは寒冷な気候や人口規模が似ており、高齢化やそれに伴う人口減少等の社会問題も同様に起きています。それらをソフトランディングさせるための方策を探っているという点で研究的な課題を共有できます。また、森林資源が豊富な点は同じですが、森林資源の効率的な利用という点ではフィンランドの方に一日の長があり、多くの知見を学ぶことがで

きます。

また、エネルギーに関して、同じ北方圏であることから太陽電池の発電量のピークと電力のピークがずれるため、太陽電池に頼らない再生可能エネルギーの開発や省エネルギーを通してZEB（ゼロエネルギービルディング）、ZEH（ゼロエネルギーハウス）を達成していく必要があります。共通の課題となっていることなどを議論しました。今回のシンポジウムでは、これらすべての課題を包括的に扱いました。シンポジウム終了後には道北地域の視察も行い、VTT、アールト大学と今後も継続して意見交換していくことを確認しました。



三宅教授による基調講演の様子



会場の様子

10月19日(月)～11月2日(月) 会場：附属図書館本館玄関ホール

## 学術成果のオープンアクセスとHUSCAP

主催：附属図書館／実施責任者：附属図書館学術システム課 課長 岸本一志

持続可能な社会の実現へ向けて、学術成果を世界の人々と共有することが出来る「オープンアクセス」と、北海道大学学術成果コレクション (HUSCAP) についてのポスター展示を開催しました。

展示では、「オープンアクセスからオープンサイエンスへ」をテーマに、オープンアクセスの現状とHUSCAPでの取り組み、オープンサイエンスの意義や展望について説明しました。さ

らに、現在HUSCAPで公開されている本学の学術成果とその意義について、本学教員にインタビューし、内容を公開しました。HUSCAPで公開されている多様な学術成果と教育研究成果を、誰もが読むことが出来るオープンアクセスの現状や、論文だけではなく研究データも一緒にオープン化するオープンサイエンスの意義や展望について広く周知することが出来ました。

附属図書館では、今後も本学のオープンアクセスやオープンサイエンスを実現するためにHUSCAPについての理解を深める取り組みを進めていきます。



展示の様子



展示したオリジナルブックカバーやしおり

10月20日(火)・21日(水) 会場：国際本部2階中講義室 (217)

## ワークショップ 国際交流のスキル —教養・学部・修士学生のための国際コミュニケーション—

主催：北方生物圏フィールド科学センター／実施責任者：北方生物圏フィールド科学センター 教授 荒木 肇

平成27年度外国人招聘教授のシルバーナ・ニコラ先生(イタリア・トリノ大学)は、現在国際園芸学会の副会長で、多数の国際教育や共同研究プロジェクトを手がけています。ニコラ先生の経験をもとにして、学部生や大学院生向けに国際交流のスキル、特にコミュニケーションに関するワークショップを開催しました。受講生の受講動機としては、「外国語の基本は英語である」「英語でのコミュニケーション能力をつけたい」「将来は海外で仕事をしたい」等の声が聞かれました。

ニコラ先生は17歳で初めて外国に行き、28歳時に国際会議で報告し、本格的な英語の勉強は30歳を超えてからだだったと自己紹介されました。その後、4つの問いかけ(①なぜ第二外国語を学ぶのか?②今後のキャリアにど

のような海外体験が有効か?③どのような環境が必要か?④海外で種々の体験をする機会はあるか?)をし、受講生と意見交換をしました。受講生からは、「外国語は英語が基本」「海外旅行の経験はあるが、それではコミュニケーションがとれるようにはならない。目的を持った海外体験が必要」「リスニングを鍛えたい」「大学間や研究室交流等を活用して国際経験を積みたい」等の回答がありました。



ニコラ先生の講演の様子

ニコラ先生からは、①できる限り英語を使う機会を多くすること(例えば留学生との気軽なセミナー等)②海外に行くチャンスがあれば積極的に活用すること③海外で体験をするための支援サイトがあることの3つの説明がありました。最後に、ネルソン・マンデラ氏の「文字を使うと頭で理解できる。そして相手の言葉を使うと心が通じる」という言葉を解説し、ワークショップを終了しました。



ワークショップの様子

10月22日（木） 会場：国際本部2階中講義室（217）

**ワークショップ 国際交流のスキル ―博士学生と研究者のための国際交流スキル―**

主催：北方生物圏フィールド科学センター／実施責任者：北方生物圏フィールド科学センター 教授 荒木 肇

平成27年度外国人招聘教授のシルバーナ・ニコラ先生（イタリア・トリノ大学）を講師にワークショップを開催しました。

受講者の多くはポスドク研究者で、今後の海外活動の一助にしたいとの希望が述べられました。ニコラ先生は、学生向けワークショップと同様に自己紹介された後、英語での国際交流の意義を説明されました。

英語は研究発表の手法であり、多くの自然科学論文は英語で執筆・報告されます。一方、技術普及書は自国の言語が使用されることが一般的で、これと対立的に考えることを避けたいと助言されました。また、英語は知識伝達

の道具であり、学生指導、講義やセミナー等がなされると指摘されました。特にヨーロッパでは、多数の外国人学生が研究室に多く在籍しており、ニコラ先生の研究室では実験マニュアル書は全て英語にしたと説明されました。英語は相互理解の道具であり、外国人学生やスタッフとの交流、プロジェクト研究の相談や企画等が英語でなされる経験も話されました。さらに、研究者の国際交流ではその他10項目（「寛容性」「適応性」「個人の自律性」「精神力」「理解力」「積極的に聞くこと」「論旨の明瞭性」「異国文化の理解」「交友関係」「相手との協働」）も重要であると解説されました。

受講した研究者との交流では「自身の研究室では海外研究者との交流が少なく、できればバックグラウンドの異なる研究者との交流を希望する」「ニコラ先生のような方と日常的に話をし、海外共同研究へのモチベーションを高めたい」などの意見が出されました。

このワークショップを通じて、参加したポスドク研究者は専門分野以外の研究者や教員との交流を求めていることがわかり、外国人招聘教員が自身の大学のことを話題にしてポスドク研究者と交流する取組は有益だと感じました。



ワークショップの様子

10月27日（火） 会場：学術交流会館小講堂、第二会議室

**女性研究者の持続的な活躍を目指して～研究人材の多様化と研究者支援のあり方～**

主催：人材育成本部女性研究者支援室／実施責任者：人材育成本部女性研究者支援室 特任准教授 長堀紀子

10月27日（火）、女性研究者支援室主催のシンポジウム「女性研究者の持続的な活躍を目指して～研究人材の多様化と研究者支援のあり方～」を開催しました。本シンポジウムは、平成25年度から実施中の文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業（拠点型）」を総括するものとして開催しました。

基調講演では、はじめに、国立研究開発法人科学技術振興機構プログラムオフィサーを務める山村康子氏より「女性研究者を取り巻く環境と政策等について」をお話いただきました。

女性研究者を取り巻く環境の国際比較、各種調査データや国内大学における取り組みのベストプラクティスの紹介、並びに今後の政策の方向性等が示されました。

次に、名古屋大学男女共同参画推進センター長の東村博子教授・副理事より「女性の活躍で大学を活性化～名古屋大学の取り組みを中心に～」と題してお話いただきました。女性研究者の活躍推進を大学戦略として位置付け、トップダウンで取り組むことの重要性並びに大学の価値向上へもたらすインパクトについて、名古屋大学を事

例に示されました。

パネルディスカッションでは基調講演のお二方に加え、金沢大学の池本良子教授、室蘭工業大学の貞許礼子特任教授、本学の望月恒子副学長を交え



基調講演の様子

て、3大学の具体的な取り組み紹介に続き、大学以外の機関との連携における効果や課題について話し合った他、今後の研究者支援の方向性や政策的意義等について幅広く議論しました。

シンポジウムには学内外から40名強の参加者が集まり、質疑応答等の活発

な議論が行われました。今後も女性研究者支援室では、多様なバックグラウンドをもつ研究者が活躍し定着できる研究環境の構築や、ダイバーシティ推進に向けた意識改革を進めて参ります。



質疑応答の様子

10月29日(木)・30日(金) 会場：学術交流会館小講堂

## 第8回セラミド研究会学術集会

主催：セラミド研究会／共催：さっぽろヘルスイノベーション“Smart-H”／  
 実施責任者：先端生命科学研究院附属次世代ポストゲノム研究センター 特任教授 五十嵐靖之

第8回セラミド研究会学術集会を10月29日(木)・30日(金)の2日間開催しました。全体の参加者約140名のうち、大学や企業研究所から100名、学内からは学生20名を含む約40名が参加し、活発な討論が繰り広げられました。

今回の海外招待講演では、皮膚バリア機構研究の第一人者であるカリフォルニア大学サンフランシスコ校のYoshikazu Uchida博士と、毛髪成長とスフィンゴ脂質に関する研究をしている韓国清洲大学のYoung Moon Lee教授に講演いただきました。そして、ランチョンセミナーでは、S1P受容体の構造解析に関して、テネシー大学の

Gabor Tigyi教授に講演いただきました。また、JSC Award受賞講演は、中部大学の芋川玄爾先生がセラミドと皮膚バリアの30年間の研究をまとめて話され、聴衆に感銘を与えました。

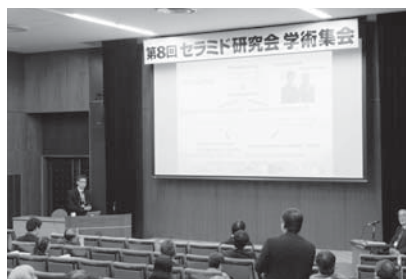
国内招待講演では、皮膚のアシルセラミドに関する酵素系の研究(薬学研究院 木原章雄教授)、真菌エンドセラミダーゼに関する研究(九州大学伊東 信先生)、上皮-間充織変換での脂質の役割(九州大学 池ノ内順一先生)、ノンターゲットリピドミクスの開発の将来展望と現状(理化学研究所 有田 誠博士)、SM小腸吸収機構(株式会社明治 藤森雅史先生)などの5題と、さらに一般演題17題の講演

がなされました。また、第6回JSC Awardには本学薬学研究院の木原教授、JSC若手賞には先端生命科学研究院の酒井祥太特任助教が選ばれました。

初日夕方にアスペンホテルで開催された懇親会には50名以上が参加し、情報交換や共同研究の話し合いが積極的に行われました。次回は来年10月末に東京ユビキタス協創広場CANVASで開催されます。また、この会の講演や討論の詳細については、食品化学新聞のセラミド特集号(11月26日号)で詳しく報道されました。



講演会の様子



質疑応答の様子



JSC賞を受賞した木原教授の様子(右側)

11月3日（火・祝） 会場：保健科学研究院

## ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ

主催：保健科学研究院／実施責任者：保健科学研究院 教授 浅賀忠義

保健科学研究院の公開講座は、「ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ」というテーマのもと、4名の講師が専門分野の紹介を行い、66名が参加しました。

第1限目は、青柳道子講師が「最後まで住み慣れた家で過ごすために」と題して、高齢者になっても病気があっても、自宅で暮らし続けられることを支えるケアについて講演しました。第2限目は、石津明洋教授が「病原菌と戦う好中球の必殺技－好中球細胞外トラップ」と題して、病原菌と戦う好中球について、好中球の細胞外トラップによる殺菌メカニズムとその障害について解説しました。第3限目は、八田達夫教授と岸上博俊助教が「超高齢化社会へ向けた車いすデザインの提案」

と題し、超高齢化社会への突入による車いす利用の増加に伴い、今よりもっと楽に座れて動きやすい車いすを提案しました。

講演者は、サステナビリティ・ウィーク2015のテーマである「札幌サステナビリティ宣言2008を再確認する」から、「大学は持続可能な社会実現のための原動力になること」をキーワード



伊達広行研究院長の挨拶の様子

として、保健科学の視点から講演しました。参加者からは概ね好評を博し、様々な質問が出て、各講師はわかりやすく丁寧に解説を行いました。今後も毎年、時代を反映するようなテーマや、興味を持って参加いただけるようなテーマを設定し、同じ時期に公開講座を開催していく予定です。



八田教授による講演の様子

11月3日（火・祝） 会場：学術交流会館第一会議室

## 脆弱な巨大炭素貯蔵庫－熱帯泥炭林－を監視する 温暖化緩和のために

主催：農学研究院／共催：環境省環境研究総合推進費（2-1504）、Wetlandセミナー／後援：JapanFlux、日本泥炭地学会／実施責任者：農学研究院 教授 平野高司

農学研究院では、環境省の平成27年度環境研究総合推進費によって、研究プロジェクト「ボルネオの熱帯泥炭林における炭素動態の広域評価システムの開発」（課題番号：2-1504）を行っています。今回は、研究プロジェクトの成果を一般市民に向けてアウトリーチするイベントと位置付けました。共同研究を実施するプロジェクトメンバー（国立環境研究所、宇宙航空研究開発機構）を招き、市民セミナー「脆弱な巨大炭素貯蔵庫－熱帯泥炭林－を監視する」と題して開催しました。

発表者5名が各々担当する熱帯泥炭に関する研究課題について、質疑応答を含めて各30分間、これまでの研究成果や今後の研究課題について紹介しました。参加者は全体で54名（留学生7名含む）でしたが、本学の学部生と大学院生、大学関係者、一般市民など幅

広い方々に参加いただきました。イベント終了後に実施したアンケートでは、34名から回答があり、「基本的・基礎的な説明からしていただけたのでわかりやすく、問題点がはっきりして良かった。一般向けでわかりやすかった」などの回答が多くみられ、94%の方が「非常に良かった、良かった」と評価する高い満足度が得られました。発表内容に関しても、94%の方が「とても易しい、易しい、適切」と回答し、研究成果や活動内容をわかりやすく参加者に説明できたと認識しています。

参加者の中には「今回のように市民向けに研究の先端の現状を紹介する機会を多く企画して欲しい」という声があり、共催・後援をいただいた機関・団体からも、このようなアウトリーチ活動を続けて欲しいとの要望を受けています。今後とも市民向けのアウト

リーチの機会を積極的に活用し、研究の進捗状況や活動報告をわかりやすく広報するよう務めていきます。



受付の様子



講演の様子

11月6日（金） 会場：農学研究院大講堂

## 臭いものに蓋をしない？：「フン」をめぐる文化論や技術論 —アフリカやアジアの事例から—

主催：工学研究院／共催：総合地球環境学研究所／実施責任者：工学研究院 教授 船水尚行

し尿や家畜糞、廃棄物は、私たちのすぐ身の回りにあります。その扱いを誤れば衛生や環境を損ねる汚染問題となりますし、それを上手に活用できれば暮らしに役立つ有用な資源となります。とはいえ、日常の暮らしの中でし尿や家畜糞は、私たちの意識の外に押し出されてきたように感じています。

このセミナーでは、し尿や家畜糞への向き合い方を日本やアジア、アフリカの事例を参照しながら、その認識や文化・社会との関わり、食料生産などの資源利用、環境負荷の低減など複数の観点から考えることを試みました。

セミナーではまず、「ヒンドゥー教における牛糞の儀礼的意味と利用」と題した講演を小磯 学先生（神戸山手大学）が行い、インドにおける牛糞に

ついて議論しました。次に、農学の観点から岩淵和則教授（農学研究院）が「循環社会と糞尿利用」という題名で講演を行い、バイオガスや堆肥としての糞尿利用を取り上げました。そして、宮崎英寿先生（総合地球環境学研究所）は「西アフリカ・内陸半乾燥地の地域開発支援に家畜糞を活かす」という講演で、牧畜民と農民の家畜糞を介した共生関係について議論しました。最後に、船水尚行教授（工学研究院）が「糞便を工学的に見る」と題した講演を行い、糞便の価値を高める技術とその西アフリカでの適用例を議論しました。最後の総合討論では多くの質問が出され、活発な議論が行われました。



岩淵教授による講演会の様子



講演に耳を傾ける聴衆の様子

11月6日（金） 会場：国際本部1階大講義室

## 留学希望者向けセミナー —SD on Campus—

主催：国際本部／実施責任者：文学研究科 教授 瀬名波栄潤

昨年に引き続き、留学希望者向けセミナーを実施しました。参加大学は、アメリカ・ポートランド州立大学、インドネシア・ガジャマダ大学、ベトナム・ベトナム国家大学ホーチミン校、ナイジェリア・エボニ州立大学の4大学でした。学生の目線での情報提供を目的に、発表者を北海道大学短期留学プログラム（HUSTEP）で交換留学している留学生に依頼しました。

イベントでは、各大学がサステイナ

ブル・ディベロップメント（SD；持続可能な開発）についてどのような教育を行い、学生が授業や授業外でSDにどのように関わっているかを発表してもらい、それぞれの特徴的な取り組みが紹介されました。また、イベント後半ではナイジェリアの伝統的なダンスが披露されました。

本イベントは今回で8度目の開催ですが、参加した学生に実施したアンケートでは「様々な国の大学の話を開

けて良かった」「海外の大学を生で感じられた」などの回答が見られました。また、発表した留学生も自らの大学を直接アピールできる貴重な機会ととらえて十分な準備を重ね、当日も満足感を抱いていたようでした。参加学生のアンケートでは、来年度に講演してほしい大学の希望についても聴取することができたので、可能な限り希望を取り入れていきたいと考えています。



上田一郎国際本部長からの冒頭挨拶



講演者への表彰状贈呈式の模様



主催者と講演者の集合写真

11月7日(土) 会場：歯学部講堂

## お口の健康と歯科医療 その1—患者サイドに立った知識の浸透—

主催：歯学研究科／実施責任者：歯学研究科 講師 有馬太郎

歯学研究科では、11月7日(土)午前9時30分から午後1時まで歯学部講堂にて、市民公開特別講座「お口の健康と歯科医療 その1」を開催しました。

本講座はサステナビリティ・ウィークとの共催であり、歯学研究科としては8つ目の企画でした。食事を楽しくするために必要なお口の健康と、問題が発生した場合の対処法・治療法について紹介することを目的として、一般の方でも十分理解できるわかりやすい言葉で4名の講師が講演を行いました。

はじめに、歯学研究科長・歯学部長の横山敦郎教授から開会の挨拶があり、次いで北海道大学病院の兼平 孝講師から「食の歴史」について、歯学研究科の松沢祐介助教から「歯の再殖」についての講演が行われました。また、一般社団法人北海道歯科衛生士会・札幌北楡病院歯科衛生士の原田晴子氏

より「歯磨きのタイミング」について、最後に、歯学研究科の有馬太郎講師から「顎関節症」についての講演が行われました。

また、同講座は国立大学フェスタの行事及び道民カレッジ連携講座としての開催でもありました。当日は少し風が強く、イチョウ並木の観光客も少なかったために観光がてらに参加される方は少なかったのですが、計25名の方が参加されました。参加者の中には、インターネットで3年前に本講座を知って以来、毎年恵庭から来てくださる方もいて感謝するばかりです。

本研究科では、今後も研究成果の地域社会への還元の一環として、道民カレッジ等に参加し、市民公開特別講座を企画・実施する予定です。また、サステナビリティ・ウィークにも持続的に話題を提供して参ります。



兼平講師による講演の様子



原田歯科衛生士による講演の様子

11月7日(土) 会場：人文・社会科学総合教育研究棟W409室

## 研究倫理国際ワークショップ —教育方法とその有効性の検証—

主催：文学研究科応用倫理研究教育センター／共催：サンクトペテルブルグ国立大学、ブカレスト大学／実施責任者：文学研究科 准教授 眞嶋俊造

11月7日(土)に開催した本ワークショップでは、大学間交流協定校であるロシア・サンクトペテルブルグ国立大学、並びにルーマニア・ブカレスト大学より研究者を招へいし、各国における研究倫理教育の現状と課題についての国際比較を行いました。また、本学並びに両協定校において実施された、研究倫理教育実践報告を通じた研究倫理教育の取り組みや教育手法の有効性について検証を行いました。

第1部は「研究倫理教育の最近の動向」と題し、日本と各国における現状を検討しました。我が国における研究倫理教育の現状は十分ではありませんが、他2国と比較するとより多角的かつ有効な取り組みが実施されていることが明らかになりました。特に、日本と他2国との大きな違いの一つは、研

究不正を行った場合の社会からの制裁だけではなく、同僚や研究者コミュニティからの扱われ方にあることがわかりました。

第2部は「教材の有効性の検証」と題し、本学並びに両協定校において実施された研究倫理教育実践報告を通じた研究倫理教育の取り組み、また教育手法の有効性について検証しました。現状ではそれぞれの機関において全学

的に標準化された研究倫理教育が行われていないが、その取り組みがそれぞれの方法で進められていることが明らかになりました。

第3部では活発なディスカッションを通し、講演者間のみならずフロアを交えた参加者間で議論を深めることができました。本ワークショップで得られた新しい知見と成果は、本学と両協定校だけではなく、日本、ロシア、



講演の様子



ルーマニア、さらに他の国々における研究倫理推進を進めるにあたって大きな示唆を与えるものでした。具体的には、社会における研究者の地位や位置づけ、研究者が研究に携わる専門職業人であるという意識と認知による研究

活動に対する研究者の姿勢、また、研究不正に対する社会からの反応に違いがあることがわかりました。また、研究倫理教育を推進していくためには研究者を研究に携わる専門職業人としてとらえ、研究倫理教育を専門職倫理教

育として実施する必要性が明らかになりました。本学と両協定校を軸とし、国際的な研究倫理教育のネットワークを世界展開するための共同研究のシーズを得ることができました。

11月7日(土)・8日(日) 会場：学術交流会館講堂

## 国際シンポジウム 地域社会へ与える考古学の影響 —ポストコロニアル時代の考古学と先住民コミュニティー—

主催：アイヌ・先住民研究センター／共催：観光学高等研究センター／後援：世界考古学会議WAC-8京都実行委員会／  
実施責任者：アイヌ・先住民研究センター 教授 加藤博文

本シンポジウムでは、持続可能な発展に具体的に貢献する手法として、考古学や文化遺産研究が先住民を含む地域社会に対してどのような貢献が可能なのかについて、ブリティッシュ・コロンビア大学、サイモンフレーザー大学、国立台湾大学、ウプサラ大学、アバディーン大学から研究者を招き、北海道内の2つの自治体での取り組みとの比較検討を行いました。提供された話題は、広く北米、東アジア、北欧、北海道における大学や自治体の地域のアイヌコミュニティとの協業の具体的事例に及び、先住民を含む地域社会と研究活動のあり方についての今

日的な課題を論じる貴重な機会となりました。北東アジア圏に位置し、国内唯一の先住民研究拠点を有する本学でのシンポジウムの開催は、北海道の地が北米と北欧とを繋ぎ、さらに東アジア地域を取り込む国際的な研究交流の結節点として重要な立ち位置を占めていることを改めて提示する結果となり、多くの参加者から高い評価を得ることができました。

本事業は、8月末から9月上旬に京都において開催される「世界考古学会議京都大会」の関連事業に位置付けられ、世界考古学会議事務局、京都大会現地実行委員会事務局からも討論者の

参加があり、今回の議論は引き続き京都での国際会議へと継続されることになりました。海外からの参加者からは、本学に対して今後も海外の研究機関をつなぐハブ的な役割を期待する意見が寄せられました。シンポジウムの他、大学院講義を利用した参加講師と大学院生が議論するラウンドテーブルを実施しましたが、海外の研究者との直接交流は、学生にとって貴重かつ刺激的な経験となりました。学生からは活発な質問もなされ、非常に高い満足度が得られました。



パネルディスカッションの様子



登壇者の集合写真



11月8日(日) 会場：国際本部(インターネット配信)

## GiFT2015—Global Issues Forum for Tomorrow— 世界の課題解決に向けたフォーラム

主催：北海道大学／実施責任者：国際本部長 上田一郎

11月8日(日)、北大生と世界の高校生・大学生がインターネット上で意見交換するフォーラム「GiFT -Global Issues Forum for Tomorrow-」を開催しました。

本フォーラムは、「北海道大学近未来戦略150」で掲げる「世界の課題解決に貢献する北海道大学へ」というテーマのもと、より多くの若者が世界の課題解決に向けて行動するよう促すことを目的とし、サステナビリティ・ウィークの一環として今回で5回目の実施となりました。

本フォーラムでは、持続可能な社会の実現に挑む本学の研究者が「世界の課題解決の方策について何ができるのかを一緒に考えよう」と英語で学生に約10分間のインターネット動画を通して呼びかけます。本年は「北極圏の気候変動が引き起こす全地球規模の変化に、わたしたちはどのように対応したらよいか」をテーマに、司会進行を日本人学生1名と外国人学生3名が務め、山口佳三総長をはじめ計4名の研究者がプレゼンテーションを行いました。山口総長は、地球規模の問題解決

を目指す上で、大学が果たす役割と協働研究の重要性を語りました。これに呼応し、参加者はチャットを通じて世界の課題解決に向けた意欲やアイデアを活発に交換しました。インドネシア、フィリピン、マレーシア、エストニア、スウェーデン、ザンビアなど、世界10カ国から267名がフォーラムに参加し、12月24日の時点で動画は2,273回視聴されています。

## ◆アーカイブ動画

<http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/gift/year2015.html>

### 講演者と講演タイトル(意訳)

総長 山口佳三

“You and Our Issues” (あなたと私たちの課題)

地球環境科学研究院 教授 杉本敦子

“Co-design Research for Better Life on Permafrost and Global Environment”

(永久凍土周辺の環境問題と住民への教育)

北極域研究センター長 教授 齊藤誠一

“Explore Phytoplankton from Space for the Arctic Marine Ecosystem”

(衛星で捉えた海中プランクトンの移動と北極域の生態系の変化予測)

工学研究院 教授 瀬戸口剛

“Desirable Urban Design for Winter Cities” (稚内駅の再建を例とした自然環境と調和する都市設計)



協働研究について講演をする山口総長



司会を務めた北大生

11月10日（火）～12日（木） 会場：百年記念会館，創成研究機構

## 北海道大学ーフィンランド ジョイントシンポジウム

主催：北海道大学／共催：ラップランド大学，オウル大学／実施責任者：国際本部国際交流課 課長 清水和子

11月10日（火）～12日（木）に、「北海道大学ーフィンランド ジョイントシンポジウム」を開催しました。本シンポジウムは、サステナビリティ・ウィーク中の企画として、オウル大学とラップランド大学との共催により開催したものであり、オウル大学，ラップランド大学，本学を中心に約80名の参加がありました。

今年度のテーマは、「北極域の持続可能性に貢献する大学の役割」とし、初日に開催したオープニングセッションでは、山口佳三総長の開会挨拶の

後、北極域研究センターの齊藤誠一センター長より基調講演がありました。続いて、上田一郎理事・副学長，オウル大学のヨウコ・ニイニマキ学長，ラップランド大学のマウリ・ユラコトラ学長，東フィンランド大学のユッカ・モンコネン学長，ヘルシンキ大学のアンナ・マウラネン副学長，北極圏大学のカリ・ライネ副学長による，各大学の取り組み内容の紹介が行われました。

その後，本学ヘルシンキオフィスの成田吉弘所長をモデレータとしたパネルディスカッションにて，参加者を含

めた活発な議論が行われました。開催期間中には，この他に「北極域における海洋・海事」「北極域における人口」をテーマとした分科会及び「北極域での資源開発」「北方圏における学術コンソーシアム」に関するセミナーが開催され，幅広い分野での議論が行われました。

これまでも本学はフィンランドと活発な交流を進めてきましたが，このシンポジウムにおいて，さらなる関係強化への期待が双方から表されました。



パネルディスカッションの様子



講演の様子



シンポジウム参加者の集合写真

11月10日（火） 会場：フロンティア応用科学研究棟鈴木章ホール

## 次世代コージェネレーションシステム公開シンポジウム ～コージェネレーションネットワークの普及に向けて～

主催：工学研究院エネルギー変換システム研究室／実施責任者：工学研究院 教授 近久武美

本行事は，平成25年4月から3年にわたって行われてきた環境研究総合推進費研究委託業務「コージェネレーションネットワーク構築のためのCO<sub>2</sub>削減・経済性・政策シナリオ解析」の研究成果を，北海道内の企業・行政・一般市民に対し広く発信することを目的として開きました。

この委託研究は，北海道地域におけるコージェネレーションの普及促進によるエネルギーシステムの低炭素化と地域経済の活性化を目指すもので，需要家サイドに分散配置されたコージェネレーションのネットワーク化，及びその実現に有効な政策的手法を提案するものです。

シンポジウム前半では，一般財団法人電力中央研究所，一般財団法人コージェネレーション・エネルギー高度利用センター，札幌市よりお招きした3名の講師の方々に，日本・北海道のエネルギー情勢の現状と課題，コージェネレーション普及の現状と今後の取組，

札幌市におけるエネルギーシステム低炭素化のための取組についてご講演いただきました。後半は，工学研究院の近久武美教授よりコージェネレーションのネットワーク化によるCO<sub>2</sub>排出量削減効果と経済波及効果について，経済学研究科の吉田文和名誉教授，外山洋



近久教授による講演の様子



札幌市 榎山和哉氏による講演の様子

一教授より海外調査の成果と政策的手法について、それぞれ研究成果を報告しました。

参加者は120名程度と当初の予定を

上回り、講演後には活発な質疑が行われ、予定の時間を10分以上超えて盛況のうちに終了しました。今後はプロジェクト成果を取りまとめて委託研究

を完成させると共に、提案実現に向けて社会への発信を続けていきたいと考えています。

11月13日(金) 会場：フロンティア応用科学研究棟鈴木草ホール

## 情報科学研究科／北海道産官学研究フォーラム 特別セミナー 社会インフラのスマートエイジングとアセットマネジメントを追求する学際研究

主催：北海道産官学研究フォーラム／共催：情報科学研究科，Digital北海道研究会，地理情報システム学会，産学官CIM・GIS研究会／後援：日本写真測量学会北海道支部，建設コンサルタンツ協会北海道支部，土木学会北海道支部，精密工学会北海道支部，北海道GIS技術研究会／実施責任者：情報科学研究科 教授 金井 理

本セミナーは、近年日本の社会的課題の一つとして認識されてきた、「橋梁・トンネル・港湾設備等の社会基盤施設の急激な老朽化」に対処するための様々な技術や取り組みについて、一般市民や学外のエンジニアへ横断的に紹介しようと、今年度初めて開催したセミナーです。工学研究院，情報科学研究科，文学研究科，公共政策大学院から多分野の研究者が集まり，また企業エンジニアも含めて，今後の社会実装に向けた産学官の連携を図ることを目的として開催しました。

このセミナーは、建設コンサルタンツ協会の継続教育（CPD）プログラムにも登録いただき，当日は道内の土木建設関係の民間企業，コンサルタント，官庁などから合計55名の聴講者が参加しました。発表は，コンクリート構造物の信頼性の予測技術，画像処理による橋梁の健全性計測，維持管理情報の長期間保存のための国際標準，維持管理におけるCIM・GISの先端の活用事例などについて，様々な観点から5件ありました。

本学の多岐にわたる研究科におい

て，社会インフラのスマートエイジングやアセットマネジメントを目指した，色々な観点での研究がなされていることが良く理解でき，今後の産学官連携研究の実施に向けた人的ネットワークを作る上で大変有意義な機会となりました。本学には，この分野に関連する研究に携わる多くの研究者が潜在的にいることを確認できたため，来年度もサステナビリティ・ウィーク行事として，同様のセミナーを企画することを確認しました。



公共政策大学院  
高松 泰特任教授による講演の様子



工学研究院 横田 弘教授による講演の様子

11月15日(日) 会場：札幌グランドホテル別館2階グランドホール

## 2015北の縄文フォーラム ―縄文文化の魅力と価値について―

主催：北海道環境生活部くらし安全局文化・スポーツ課縄文世界遺産推進室／共催：北海道大学／  
実施責任者：アイヌ・先住民研究センター 教授 加藤博文

世界遺産登録を目指している北海道の縄文文化の素晴らしさや魅力を、多くの方々に知っていただくと共に理解を深めていただくため、「縄文文化の魅力と価値」をテーマに公開フォーラムを開催しました。本フォーラムは、平成21年度から毎年開催しています。

今年度は、北海道庁の縄文世界遺産推進室と本学の共催という形で、本学の大学間交流協定締結校であるイギリスのイースト・アングリア大学日本学研究センター長のサイモン・ケイナー博士を基調公演の講師に招き、「海外から見た縄文文化の魅力について」と題して、海外の目線から縄文文化のもつ世界史的価値、現代に至る日本文化の魅力についてお話いただきました。ケイナー博士は、イギリスを代表する日本文化研究者として広く知られる存在であり、大英博物館において好評を得た「縄文土偶展」の企画責任者

でもあります。

基調講演に続いて行われたパネルディスカッションでは、「縄文文化の価値とその活用」をテーマに、北海道の縄文遺跡群の特徴と可能性について、大学教授や関係自治体職員等をパネリストとし、考古学の現場やまちづくりの観点、観光資源としての活用の可能性など幅広いディスカッションが行われました。

参加者は、札幌市内の方が大勢を占

めていましたが、道内のその他の市町村、また道外からも出席いただき、237名と例年より多くの参加者を得ることができ、このテーマについての市民の関心の高さを改めて確認することができました。今後とも、本フォーラムに寄せられたご意見をもとに、北海道の縄文遺跡群の世界遺産登録を目指し、「縄文文化の魅力と価値」を、道内はもとより国内、海外へ発信してまいります。



講演会の様子



パネルディスカッションの様子

11月21日(土)～23日(月・祝) 会場：クラーク会館大講堂

## CLARK THEATER 2015—Lead—

主催：北大映画館プロジェクト／実施責任者：教育学部2年 曾束芽吹

クラーク会館講堂にて、学生や市民に開放した期間限定映画館「CLARK THEATER 2015」を開催しました。当イベントは平成18年に始まり、10周年になります。本学に常設映画館を作ることを目標に、その過程の一環として毎年開催している「CLARK THEATER」は、北大生を中心とする学生が運営、作品の選定などを行い

ます。

今年はチェコのアニメーション映画やフランス映画、中編日本映画など様々なジャンルの作品を上映しました。また、映画についてより深く知るべく、SF小説家の長谷敏司先生や公立はこだて未来大学複雑系知能学科の松原 仁教授をはじめ、4名の専門家を招いてのトークショーを企画・開催

しました。

今年のテーマは、「先頭に立つ」や「案内する」の意味を持つ「Lead(リード)」とし、主に映画界を先導してきた名作SF映画、これから映画産業を担っていくだろう最先端の技術に関する映画などを上映しました。映画の歴史を振り返ると同時に、未来に繋がる可能性を感じていただき、映画



開演前の会場の様子



トークショーの様子



参加者の集合写真

の発展や映像技術に関する情報を発信しました。映画を観るという共通の体験を通して世代を超えたコミュニケーションの場を創造し、持続可能な社会実現に貢献するイベントになったと思います。

います。

延べ2,125人もの方々に来場していただき、改めて映画の良さを感じると共に、本学に映画館があることの魅力を伝えることができた実感しています。

す。今後も、より多くの方に「CLARK THEATER」の魅力、そして私たち映画館プロジェクトの活動を知ってもらい、常設映画館の創設に向け、さらに邁進していきます。

11月21日(土) 会場：人文・社会科学総合教育研究棟W103教室

## 経済学研究科地域経済経営ネットワーク研究センターシンポジウム

主催：経済学研究科地域経済経営ネットワーク研究センター（REBN）／共催：観光学高等研究センター／  
実施責任者：経済学研究科地域経済経営ネットワーク研究センター長 教授 町野和夫

11月21日(土)、人文・社会科学総合教育研究棟W103教室において、経済学研究科地域経済経営ネットワーク研究センター（REBN）主催、観光学高等研究センター（CATS）の共催、北海道、札幌市、日本政策投資銀行、北洋銀行、北海道観光振興機構の後援によるシンポジウム「北海道の観光と地域振興－インバウンド観光の先に見えるもの」を開催しました。3連休初日にも関わらず、一般の方々を中心に140名もの参加がありました。

本シンポジウムでは、まず株式会社北海道チャイナワーク及び株式会社プレミアム北海道の社長である張 相律氏と、JTIC. SWISS代表、観光学高等研究センター客員准教授で日本政府認定の「観光カリスマ」である山田桂一郎氏にご講演いただきました。張氏からは「北海道におけるインバウンドビ

ジネスのチャンス」、山田氏からは「世界から選ばれ続ける地域とは」というタイトルで、海外からの観光客（インバウンド）の急拡大を地域の生き残りや発展に繋げていくために、北海道の各地域がそれぞれの地域の魅力を磨き上げ、自らのライフスタイルをより豊かにすることがいかに大切かについて、多くの興味深い事例を交えてお話しいただきました。

シンポジウムの後半では、講師のお

二人にCATSの小林英俊客員教授にも加わっていただき、町野和夫REBNセンター長をコーディネーターとするパネルディスカッションを行いました。観光の質を向上させ、地域のライフスタイルをより豊かにするために、業界、行政、地域住民が何をすべきかについて、前半の講演と小林教授の解説を基に、参加者からの質疑応答も含めて充実した議論が交わされました。



講演の様子



パネルディスカッションの様子

11月22日(日) 会場：学術交流会館講堂

## 同性パートナーシップ制度導入を考える

主催：文学研究科応用倫理研究教育センター／共催：法学研究科附属高等法政教育研究センター、公共政策大学院／  
実施責任者：文学研究科 教授 瀬名波栄潤

本フォーラムでは、「同性パートナーシップ制度」の地方都市導入の意義と課題を議論しました。当事者、支援者、弁護士、研究者などが登壇し、人権問題、国内外の動向、地方創生などの観点から、地方自治体における同条例制定を検討し、大学の役割と持続可能な社会作りを来場者と共に議論しました。

同性パートナーシップ制度は、現在最も注目を集める新制度の一つで、地

方自治体が一定要件の下で同性カップルを公式承認する制度です。3月には渋谷区で「条例」が制定され、11月5日に「パートナーシップ証明書」を発行、7月には世田谷区パートナーシップ宣誓書提出・受領書発行の報道もありました。法的拘束力はありませんが、性的少数者の基本的人権を擁護、保障するために必要と唱える声や、社会全体の活性化の方策の一つとして利用すべきという考えなど、導入への反

応も様々です。

フォーラムでは、3名のパネリストと1名のコメンテータに登壇いただきました。パネリストには、札幌弁護士会所属弁護士で須田布美子法律事務所代表の須田布美子氏、LGBT\*支援のための市民グループ「北海道セクシャルマイノリティ協会」創始者であり、明治大学法学部教授で本学名誉教授でもある鈴木 賢氏、国際基督教大学元教授・同ジェンダー研究センター初代

センター長で、現在ジェンダー・セクシュアリティ研究理論を参加型学習につなぐ個人事業「ファームメント」代表の田中かず子氏、コメンテータには、地域の自立的発展、地方分権、公民連携を主な関心領域として研究する、公共政策大学院長の石井吉春教授を招きました。司会進行は応用倫理研究教育

センター員の瀬名波栄潤教授が務めました。

同性パートナーシップ制度導入を巡り、直近の課題、中長期的目標と戦略など様々な意見を交換し、会場からの質疑も活発でした。開催告知が朝日新聞・毎日新聞・北海道新聞で載り、開催後は北海道新聞で写真付きの報告記事が掲載されました。

\*LGBT

レズビアン (Lesbian)、ゲイ (Gay)、バイセクシャル (Bisexual)、トランスジェンダー (Transgender) の頭文字をとった性少数者を表す総称。



登壇者の集合写真



パネルディスカッションの様子

11月28日 (土) 会場：附属図書館本館オープンエリア他

### 第3回国際協力カフェおよびイベント

主催：附属図書館（国連寄託図書館）／共催：国際本部／後援：国際協力機構北海道国際センター（JICA北海道）、北海道、札幌国際プラザ、日本国際連合協会北海道本部／実施責任者：附属図書館利用支援課 課長 豊田裕昭

11月28日 (土)、本館オープンエリア（ラーニング・コモンズ）において第3回国際協力カフェ「国連フォーラム スリランカ・スタディ・プログラム 報告会：SDGsから考える、セカイの未来 わたしの未来」を開催しました。

国際協力カフェは、附属図書館が北海道で唯一指定されている国連寄託図書館として、国際協力に関わる講師を招き不定期に開催する公開講演会です。第3回の講演者は、学生を含む、国連に関心を持つ有志による任意団体「国連フォーラム」でした。

第1部は、国連機関の活動現場を訪問する「2015 スリランカ・スタディ・プログラム」について、参加学生からの報告でした。続いて第2部は、報告者をファシリテータとした参加者によるグループディスカッションで、ディスカッションのテーマの一つは、国連が9月に採択した持続可能な開発目標（SDGs）でした。

当日の参加者数は、学生・教職員・高校生を含む市民を合わせた46名でした。参加者アンケートからは「自分で考

えることの重要さを感じた」といった声が寄せられ、特にディスカッションの満足度の高さがうかがわれました。

今回は、参加者が主体的に参加するディスカッションの場を設けることで、国連や関連機関の取り組みについてより深く考えていただける機会に

なったと言え、国連寄託図書館の活動として一定の成果をあげました。

なお、イベントとして11月10日（火）から28日（土）にかけてSDGsに関する図書展示・パネル展示と、スリランカ・スタディ・プログラムの写真展示を実施しました。



ディスカッションの様子



参加者の集合写真

11月28日(土) 会場：情報教育館3階スタジオ型多目的中講義室

## 周縁から越える「境界」—日韓演劇人の越境のかたち

主催：メディア・コミュニケーション研究院附属東アジアメディア研究センター/  
 実施責任者：メディア・コミュニケーション研究院 准教授 玄 武岩

札幌と大阪という地方都市で韓国と日本の演劇交流に取り組む市民を招いて、シンポジウム「周縁から越える『境界』—日韓演劇人の越境のかたち」を開催しました。日本と韓国の関係が政治的に膠着するなか、地道に文化交流を続けてきた人たちの事例を通じて、今後の日韓関係の未来を探ろうと企画したものです。

第1部は、本学教員と外部研究者による対談を行いました。日本植民地時代の朝鮮に生まれたことを「原罪」と意識しながら、終戦後に炭鉱労働や女性問題について多くの著作を発表した森崎和江を取り上げ、彼女の思想から日韓関係の展望を考えました。

第2部は札幌・大阪・ソウルの演劇人によるシンポジウムを行いました。

韓国の劇団との共同作業を続けている北海道演劇財団「札幌座」と大阪の「Drama Mission Z號」の活動を映像を交えて紹介し、日韓交流を始めた契機について聞いたうえで、市民による文化交流が両国関係にどのような影響をもたらすのかについて討論しました。参加者は本学教員、学生、一般市民

合わせて約40人でした。

日韓両国は政治、経済、文化などあらゆる面で歴史的に密接な関係にあった隣国であり、それは今後も変わることはありません。各分野で様々な研究が行われていますが、当研究院では特に文化的側面から両国の関係を考察する企画を今後も続けていく計画です。



対談の様子



パネルディスカッションの様子

11月30日(月)～12月2日(水) 会場：低温科学研究所3階講堂

## 低温科学国際シンポジウム

主催：低温科学研究所 / 実施責任者：低温科学研究所 教授 Ralf Greve

低温科学研究所は、「低温科学国際シンポジウム」を11月30日(月)から12月2日(水)の3日間にわたり、低温科学研究所3階講堂で開催しました。

このシンポジウムは、当研究所の研究テーマである、寒冷圏及び低温環境下における諸現象に関する基礎的・応用的研究に関して、その最新の成果と将来展望について議論することを目的として企画しました。

シンポジウムでは、(1)水及び物質の循環(2)雪氷の新領域科学(3)環境生物学(4)環オホーツク領域の研究について、英語による4つのセッションを実施しました。

今回の総参加者数は97名(うち、外国人研究者・外国人大学院生等14名)で、ドイツ、米国、スイスからの参加もありました。また、ブレーメン大学、スイス連邦工科大学、アルフレッド・ウェゲナー極地海洋研究所等の、

海外の大学・研究機関から招聘した7名の研究者から最新の海外研究状況等についても紹介が行われました。

昨今、環境問題においては寒冷圏の地球環境変動での位置づけの重要度が増してきています。そのため、サステナビリティという観点から本シンポジウムは非常に有意義な会となりました。



オープニング挨拶の様子



ポスターセッションの様子



参加者の集合写真

12月3日（木） 会場：学術交流会館講堂

## サステイナブルキャンパス国際シンポジウム2015

主催：サステイナブルキャンパス推進本部、施設部／  
 実施責任者：サステイナブルキャンパス推進本部 プロジェクトマネージャー 横山 隆

「持続可能な社会実現のためのチーム・ビルディング」をテーマに、大学が社会的役割を果たすためにはどのような戦略と組織づくりを推進すべきか、具体的に議論することを目的としてシンポジウムを実施しました。

基調講演では、「社会的学習の場」というキャンパスの新しい役割と、教職員が周辺の地域社会と関わる価値の2つの視点から、3名の講演者を招聘しました。

米国マサチューセッツ工科大学（MIT）のジュリー・ニューマン博士からは、世界をリードする一流大学として、またエネルギー負荷の大きい工学系研究重点大学として、MITがサステイナビリティ戦略をどう捉えているのか、そしてケンブリッジ市との連携プロジェクト「エコ・ディストリクト」がどのように推進されているのかを講演いただきました。カナダのブリティッシュコロンビア大学（UBC）は地元バンクーバー市との都市計画における

協働事業の実績が多く、キャンパスの環境負荷低減でも連携しています。ジェームス・タンシー教授よりこの点について講演いただきました。名古屋大学は、大学執行部、教職員、建築環境に関わる研究室を巻き込んだキャンパスマネジメントの組織体制が確立していることで知られており、田中英紀特任教授よりその組織づくりと成果について講演いただきました。

基調講演後、パネルディスカッション「世界の課題解決と持続可能な社会構築に向けた大学の体制—札幌サステイナビリティ宣言（G8大学サミット、2008年）以後の北海道大学の取組」を行いました。経済学研究科長の吉見宏教授の司会のもと、三上 隆理事・副学長、川端和重理事・副学長もパネリストとして参加し、教育・研究という大学の“本分”にサステイナビリティ学をどう取り込みうるか議論を行いました。



ニューマン博士の講演の様子



タンシー教授講演時の会場の様子



パネルディスカッションの様子



12月12日（土） 会場：フード&メディカルイノベーション国際拠点

## HULT PRIZE@北海道大学 学内コンペティション

主催：Hult Prize Hokkaido Universities' Team／共催：フード&メディカルイノベーション推進本部／  
 実施責任者：国際広報メディア・観光学院 博士課程2年 Dicko Seydou

12月12日（土）、道内初のHult Prize\*学内コンペティションを本学で開催しました。総勢17チーム、計61名の学生が参加し、世界を変える社会企業の起業アイデアを競いました。本学の国際的な広報と共に、学生のために研究やアイデア、技術を実用的に使う国内外の社会に貢献できるプラットフォームを作ることを目的に、国際広報メディア・観光学院博士課程のDicko Seydouさん、保健科学院修士課程のKritika Poudelさん、教育学院博士課程の岩佐奈々子さんの3名が中心となって参加資格を得て、今回の開催に至りました。

学年や、国籍など多様な顔ぶれの17チームが参加し、今年度のテーマである世界の密集都市の課題解決のため、水、電力、農法、食料、ナノテクノロ

ジーやゴミ問題など、様々な視点から提案を行いました。審査は、株式会社アミノアップ化学代表取締役会長の小砂憲一氏、在札幌米国総領事館広報・文化交流担当領事のハービー・ビズリー氏、一般社団法人re:terra代表理事の渡邊さやか氏、株式会社グロービス研究員の小早川鈴加氏、生命科学院の西村紳一郎教授の5名が行いました。約120名の観客が来場して大会を盛り上げました。

優勝は、垂直農法キットを提案したチーム“Awrka”に決定し、第2位に食用ウキクサを提案した“がんばろう環境”が続きました。優勝チームは米国で行われる地区大会に出場します。

今回の開催にあたり、新渡戸スクールの難波美帆特任准教授及び人材育成

本部の飯田良親特任教授に多大なるご協力をいただきました。来年度以降もHult Prize大会を開催し、持続可能な社会実現のために、国際的な学生のためのプラットフォームを形成していきたいと考えています。

※Hult Prize（ハルト・プライズ）

クリントン財団が後援し、国際的に急速に評価を高めているビジネス・スクール Hult International Business Schoolが実施する、大学生が世界を変える社会企業の起業アイデアを競う国際大会。起業資金となる優勝賞金100万ドルを目指し、毎年世界中の大学でコンテストが実施される。勝ち抜いたチームは予選を経てニューヨーク開催の決勝に進み、優勝者は国際的なビジネス・リーダーによる起業支援の機会を得る。2016年大会には、日本から本学と上智大学の2校のみが参加資格を得た。



優勝チームの表彰式の様子



第2位チームの発表の様子



ボランティア学生による受付の様子



参加者と審査員の集合写真

※計32企画のうち、11月5日（木）・6日（金）開催の「日本-インドネシア学長会議」及び11月16日（月）開催の「WHO 研究協力センター指定記念講演会」は、北大時報12月号に記事を掲載しています。

## 第18回ソウル大学校・北海道大学ジョイントシンポジウムを開催



全体会での集合写真

11月26日（木）・27日（金）に、第18回ソウル大学校・北海道大学ジョイントシンポジウムを開催しました。本学とソウル大学校は、1997年の大学間交流協定締結を機に、1998年より毎年交互にホスト校となり合同シンポジウムを開催しています。合同シンポジウムの一環として、複数部局が分科会を開き、共通分野での教育・研究交流を行っています。

今年で18回目を迎えた本シンポジウムは、全体会及び19の分科会が、ソウル大学校を主会場とし盛大に開催され

ました。26日（木）には全体会が催され、ソウル大学校のSUNG Nak-in総長と本学の山口佳三総長から、長きに亘る交流を祝い、更なる持続的継続・発展を願う挨拶がありました。また、「Climate Change Impacts on Natural Disasters（気候変動が自然災害に及ぼす影響）」をテーマとして両大学の基調講演が行われ、ソウル大学校工科大学のYOON Jeyong教授からは「Development and Application of Appropriate Technology in the Era of Climate Change（気候変動時代におけ

る適切な技術開発とその応用）」が、本学工学研究院の山田朋人准教授から「Global Hydrological Cycle and Its Predictability Associated with Human Activities（人間の活動に関連した世界的な水循環とその予測可能性）」について講演がありました。続くレセプションでは、ソウル大学校音楽大学国学科、声楽科、器楽科の学生による演奏もあり、和やかに初日を終わりました。

（国際本部国際交流課）



両学総長の記念品交換



山田准教授による基調講演



学生の演奏

## 分科会1

## The 4th HU-SNU Joint Symposium on Materials Science and Engineering

第4回材料科学に関する合同シンポジウム／工学研究院 准教授 橋本直幸

本シンポジウムは、ソウル大学校のKIM Youngwoon教授のご協力のもと、本学工学研究院材料科学専攻とソウル大学校工科大学材料工学科との間で開始され、昨年度よりHAN Heung Nam教授を窓口とし、本年度は11月27日（金）にソウル大学校工科大学材料工学科棟内会議室において開催しました。

ソウル大学校・本学合わせて計10名の教授・准教授にソウル大学校の大学院生及び学部生10数名を加えて、計30

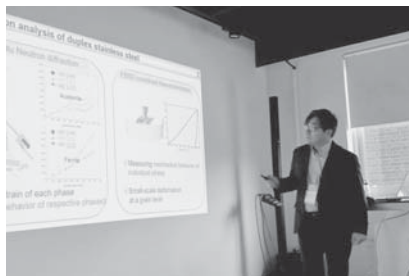
名程度の参加者数となり、8名の先生から材料科学に関する最新の研究紹介がありました。材料科学に関する内容ではあるものの、それぞれの研究の応用範囲は幅広く、個々の専門を超えて活発かつ有意義な討論が行われました。双方の最先端の実験設備や解析手法に興味を持ち、意見交換の後に近い将来の共同研究も視野に入れた交流もあり、本シンポジウムが研究及び教育の幅を広げる貴重な場になり得ることが確認できました。今後、これまで実

績のある大学院生のインターンシップに加えて、博士課程学生によるシンポジウムや、一部の研究分野で計画中のサマープログラムを活用し、ソウル大学校の大学院生を受け入れるといった学生間の交流事業について具体的に進めたいと思います。

両校の材料科学分野の研究者にとって有意義なシンポジウムになったことを実感しつつ、来年度の札幌開催を確認して閉会しました。



池田賢一准教授による講演



HAN教授による講演



参加者による記念撮影

## 分科会2

## Chemical Exposures among Sensitive Populations and Environmental Health Implications

脆弱な人々への化学物質曝露と環境衛生上の意義／環境健康科学研究教育センター 特別招へい教授 岸 玲子

化学物質曝露による健康影響に関する分科会は、昨年に引き続き2回目の開催となりました。分科会には、本学から3名がソウルを訪問し、ソウル大学校からは教員、研究員、大学院生16名に加えて、漢陽大学校、順天郷大学校、梨花女子大学校の共同研究者、韓国国立環境研究院、韓国環境省担当官から8名、合計33名が参加して活発な意見交換が行われました。

セッション1ではソウル大学校で行っている「CHECK (Children's Health and Environmental Chemicals in Korea)」と本学が行う「環境と子どもの健康に関する北海道スタディ」の研究紹介が、両大学の分科会代表者であるCHOI Kyungho教授、岸 玲子特別招へい教授より行われました。加

えて、本年初めて企画したポスター紹介では、20演題以上のポスターが準備され、お互いの研究に関する理解を深めることができました。セッション2はコーホートの維持と曝露評価について、お互いが研究を進めていくうえでの課題解決への議論がなされました。セッション3は今後の共同研究計画や講義提供に関する意見交換を行い、今後の研究・教育連携に向けて有意な意見交換を行うことができました。

最後は梨花女子大学校のHA Eunhee教授より、新しく始まる韓国の出生コーホートに関する特別講演があり、閉会となりました。次年度は本学で第3回となる分科会を開催予定です。



分科会集合写真



分科会における討論風景

分科会3

## SNU-HU-NTNU-KU Joint Symposium on Asian Science Education in the 21st Century

21世紀のアジアにおける科学教育についてのSNU-HU-NTNU-KUジョイントシンポジウム／教育学研究院 教授 大野栄三

ソウル大学校側代表のKIM Chan-Jong教授の提案で、タイ王国カセサート大学（KU）で開催されたThe 3rd International Conference for Science Educators and Teachers（ISET 2015；第3回国際理数系教育

者・教員会議）の中で、分科会を実施しました。国立台湾師範大学（NTNU）とカセサート大学を加えた4大学に拡大した分科会になりました。

ISET 2015は、タイの理数系教員養成を担う複数の大学が持ち回りで開催

している国際会議です。本分科会は ISET 2015参加者にも公開されており、広くアジアの研究者、大学院生と交流できました。来年度は、本学を会場に4大学の分科会として開催する予定です。



オープニングセレモニーの様子



分科会での発表の様子



分科会4

## Toward Understanding of Changing Environment

変わりゆく地球環境の理解に向けて／理学研究院 講師 佐々木克徳、環境科学研究院 特任教授 吉川久幸

本分科会は「変わりゆく地球環境の理解に向けて」というテーマで、ソウル大学校自然科学大学地球環境科学部において計20件の研究発表を行いました。

今年度のジョイントシンポジウムの全体会のテーマである「気候変動が自然災害に及ぼす影響」に即したテーマであり、熱心な議論が交わされました。午前にはソウル大学校のCHO Yang-

Ki教授による歓迎の挨拶で始まり、主に古気候、大気海洋化学等について本学から5名とソウル大学校の4名が各々の研究について口頭発表を行いました。昼食休憩後には研究室ツアーを開催し、海洋生物から衛星観測の研究室まで計4か所を訪問し、観測機器や実験装置についての見学を行いました。午後は主に気象、海洋物理・生物についての口頭発表を本学から7名、

ソウル大学校から4名が行いました。分科会の最後には本学の山本正伸准教授が、今年度の若手研究者・大学院生の熱心な発表とその準備への賛辞と、来年度の本学での分科会の開催と再会を約束し閉会となりました。出席者数は30～40名程度でした。

今後とも研究活動の交流を通じ、両校の友好的な関係を維持するように努めていきたいと考えています。



分科会の集合写真

## 分科会5

## 2015 International Workshop on New Frontiers in Convergence Science and Technology

複合領域科学及び技術の最前線／情報科学研究科 教授 平田 拓

11月27日（金）午前、ソウル特別市に隣接するSuwon市にあるソウル大学校Graduate School of Convergence Science and Technology（GSCST複合領域科学技術研究科）において分科会を開催しました。分科会に先立ち、GSCST副研究科長であるSHU Bongwon教授から開会と歓迎の挨拶がありました。

本分科会はソウル大学校のPIAO Yuanzhe准教授と共同で準備され、本学からは3件の講演、ソウル大学校からは4件の講演を行いました。本学、ソウル大学校と近い分野の演題を、一人あたり20分で交互に発表しました。具体的には、神経科学、ナノ材料・デ

バイス、バイオイメージングの分野から講演を行いました。分科会全体の参加者は30名程度で、そのうち、本学及びソウル大学校の教員は10名、大学院生は20名程度でした。午後には研究科内の4研究室を見学し、研究環境につ



分科会に参加した両大学教員の集合写真

いて理解を深めました。さらに、韓国と日本の大学における研究環境や研究助成、教育などについて広く意見交換し、互いの理解を深めました。

来年は本学で分科会を開催する予定です。



脳埋込型マイクロ電子デバイスについて講演する舘野 高教授

## 分科会6

## Drug Discovery and Smart Nanomedicine

創薬とナノ医療／薬学研究院 特任准教授 梶本和昭

6回目となる本分科会は、日本学術振興会二国間交流事業（韓国との共同研究）（平成26-27年度、代表：梶本和昭、OH Yu-Kyoung）の一環として11月27日（金）にソウル大学校薬学大学院にて開催しました。平成27年7月に本学薬学研究院とソウル大学校薬学大学院との間で部局間交流協定が締結されたことを受け、一部の研究室間で継続してきた国際交流の芽が部局間での学術・人材交流の場として大きく花開くこととなりました。本学からは、南雅文薬学研究院長を含む教員6名と大

学院生・学部生9名、ソウル大学校からはLEE Bong-Jin薬学大学院長を含む教員8名と博士研究員・大学院生12名が参加しました。

シンポジウムの発表演題は27件に上り、過去最大規模の分科会が盛大に執り行われました。聴衆全員の投票による優秀発表賞の選考では、ソウル大学校のPARK Joo Yeon氏（大学院生）と本学のABBASI AY Sa'ed氏（大学院生）が優秀賞を受賞し、本学の羽田智哉氏（大学院生）が特別賞を受賞しました。懇親会においても、両校の学

生間で積極的に会話を楽しむ場面が見られ、貴重な人材交流の機会としても大成功であったと思われます。また、新たな試みとして、両校の学生を少人数ずつ4つのフォーカスグループに分け、シンポジウムの翌日に討論会を催しました。時間制限を設けず、自由に発言・意見交換できる討論会は両校の学生にも好評であり、国際交流の若い芽を育む機会として今後も継続していきたいと思えます。



記念品贈呈（Lee薬学大学院長（左）、南薬学研究院長（右））



分科会での集合写真

分科会7

## The 11th HU and SNU Symposium on Mathematics - Mathematical Analysis and Applications

数理解析とその応用／理学研究院 教授 栄伸一郎

数学関連のジョイントシンポジウムとして、今回で11回目となる分科会を招待講演4件（ソウル大学校，本学各2名ずつ），一般講演6件（各3名ずつ）及び学生を主体としたポスター発表14件（各7名ずつ）という内容で開催し，逆問題や確率過程，界面問題やフーリエ解析に関連する内容など，数

理解析の応用を意識した研究発表が行われました。

特にポスターセッションは学生が主体となり運営し，セッションの最初には各自数分程度のショートプレゼンテーションを行うなど，学生にとって貴重な国際交流体験の場になったと思われます。

その後の懇親会は和やかな雰囲気の中で行われ，11回目となる開催回数が分科会中最多という情報がその歴史とともに紹介されるなど，こうした研究集会を継続開催していくことの重要性が再認識されるとともに，今後とも協力して開催していくことなどに多くの賛同が集まりました。



参加者集合写真



ポスターセッションの風景

分科会8

## Traveling Asia and Geographical Imaginaries

アジアのツーリズムと地理学的想像／メディア・コミュニケーション研究院 准教授 金成玟

本分科会は，「アジアのツーリズムと地理学的想像」をテーマに11月27日（金）にソウル大学校アジア研究所で開催しました。ソウル大学校からはKANG Myungkoo教授（ソウル大学校アジア研究所長），NAM Eun Young研究員が，本学からは岡本亮輔准教授と周倩助教，金成玟准教授が参加し，講演と司会進行を行いました。他にもトルコのKadir Has大学，日本の立教大学から研究者をお招きし，より国際的な観点から日中韓を中心とした東アジアの観光文化に関する議論を行いました。

分科会はKANGソウル大学校アジア研究所長の挨拶で始まり，「中国人観光客の経験と自己認識」「日本のナ

ショナルリズムと聖なる場所」「中国ミドルクラスによる観光経験」「日本における中国人観光客」「トルコの観光産業におけるアジア認識」のテーマによる5つの発表と5名の討論者（ソウル大学校の教員と韓国の観光政策専門家等）による討論の順で構成されました。全体で36名の参加者があり，大学院生も参加し，活発な議論がなされました。

シンポジウム前のソウル大学校アジア研究所との会議では，今回の成果を今後ジャーナルや書籍の出版などの形で発信することに合意しました。またシンポジウム後の懇親会では，今後の共同研究の計画についてお話しするとともに親睦を深めることができました。



口頭発表の様子



会場での集合写真

## 分科会9

## Electrons in Chemistry

化学における電子／理学研究院 教授 佐田和己, 工学研究院 教授 島田敏宏

11月27日（金）にソウル大学校で教員、大学院生30名以上の参加者を集めて本分科会を開催しました。本学からは教員5名（理学研究院3名，工学研究院2名）が基調講演1件と招待講演4件を，大学院生6名がポスター発表を，ソウル大学校からは若手教員を中心に4名が基調講演1件と招待講演3件を，大学院生11名がポスター発表を行い，計算化学から材料，生物にわたる広い学術領域で，電子材料の設計，物性・機能評価，さらに最新の分光学的手法によるナノ構造やその特異な物性の解析など，両大学の化学関連部門が強みとする分野における最新の成果が発表されました。

今回も前回同様，大学院生による各3分間のポスターパレード（口頭発表）があり，制限時間を守って，緊張気味ながら研究成果を一生懸命アピールする姿が印象的でした。講演は，制限時間を超えての熱心な質疑応答が行われました。ポスター発表では大学院生間で懇親会直前まで討論が交わされ，両大学間の今後の協力関係について，次世代の若い力を心強く感じる機会となりました。懇親会においても，日韓の教員，大学院生との歓談の中で今後の相互訪問や共同研究，次回シンポジウムに関する提案も出され，両大学間協力関係の今後のさらなる発展が期待される，双方にとって実り多いシ

ンポジウムでした。何名かの大学院生にとっては初めての海外渡航であり，新千歳空港でパスポートを忘れたことに気がついた学生がおり，対応に苦慮しましたが，なんとか後発の便にてソウルに向かうことができ，分科会へ参加できました。きっと良い経験になったものと思われます。



シンポジウムでの集合写真

## 分科会10

## Future Education with ICT

ICTを活用した教育の未来／高等教育推進機構 教授 細川敏幸

本分科会は11月27日（金）午前10時からソウル大学校（SNU）Center for Teaching and Learningの301号室で開催しました。本学からは小林幸徳教授がオープンエデュケーションセンターの組織とその活動を紹介しました。佐多正至氏と田中宏明氏は同センターの活動の詳細として，OCW（オープン・コースウェア）の経験を引き継ぐ授業の動画記録，さらにはMOOC（大規模オープン・オンライン・コース）やedX（MITとハーバード大学が創立したMOOCプラットフォーム）にも参加していることを報告しました。またPARK Hyunjung准教授はCoSTEP（科学技術コミュニケーション教育研究部門）の活動の概要とICT（情報通信技術）を利用した子供たち

への科学教育について詳しく説明しました。山本堅一准教授は高等教育研修センターの設立と今年の研修活動の概要について話しました。

一方，SNUからはKIM Sunyoung教授により韓国のMOOCについての説明がありました。韓国では，およそ40の大学が参加するKOCW（韓国オープン・コースウェア）があります。これに加えて2012年からedXを開始しました。10分程度の講義と小テストを組み合わせて5～8週で終了するよう計画されており，現在4コースを提供しています。PARK Taejung氏は10大学が参加しているK-MOOCが生涯学習やFlipped Learning（反転学習）の助けになるよう計画されていることを説明されました。現在27コンテンツが配信

されており，来年には100，2018年には500になる予定です。最後にHEO Sung氏はOPENedXの世界的な進展（反転学習）について説明されました。現在世界中で146サイトから1,840コースが提供されています。40の国から18種類の言語を使って公開されており，今後その影響が広がることが期待されます。



参加者記念撮影

分科会11

# The 10th Japan-Korea International Symposium in Ophthalmology

第10回日韓国際眼科シンポジウム／医学研究科 診療准教授 南場研一

11月20日（金）・21日（土）に第10回日韓眼科シンポジウムをソウル市内のDalgaebiセミナーハウスで行いました。第10回の記念シンポジウムということもあり、本学から石田 晋教授、南場研一診療准教授、北市伸義客員臨床教授、岩田大樹助教、神田敦宏特任講師の5名、ソウル大学校からはYU Hyeong Gon教授をはじめとする16名が参加し、例年よりも規模の大きな会

となりました。はじめに、本学の石田教授による開会の挨拶の後、本学から5演題、ソウル大学校から6演題の講演があり、最新の話題や興味深い演題が多く、活発な意見交換が行われました。懇親会では第10回の節目にあたるということもあり、ソウル大学校側より記念のセレモニーが準備されていました。本学の石田教授とソウル大学校のYu教授によりケーキカットが行わ

れ、また、過去10年のシンポジウムの様子がスライドで紹介されました。分科会の歴史を振り返ることができ、感慨深いものがありました。次の10年もより良いシンポジウムに発展していくことを期待したいと思います。来年は札幌で第11回日韓眼科シンポジウムを行う予定ですが、台湾チャングン大学の先生もお招きする予定です。



シンポジウムの様子



石田教授（左）、ソウル大学校Yu教授（右）による共同ケーキカット



参加者による記念撮影

分科会12

# The 3rd Seminar on Renewable Energy and Indoor Air Environment for Comfort and Energy Conservation in Buildings

第3回建物の快適性と省エネルギーのための再生エネルギーと室内環境に関するセミナー／工学研究院 教授 長野克則

工学研究院環境システム工学研究室では、分科会を11月27日（金）・28日（土）に開催しました。ソウル大学校からは建築学専攻建築環境計画研究室のKIM Kwangwoo教授、大学院生（15名）が、また成均館大学校のPARK Cheolsoo准教授、世宗大学校のSUNG Mingi助教授が参加しました。本学からは長野克則教授、葛隆生准教授、博士課程の学生1名、修

士課程の学生3名が参加しました。省エネルギー換気装置であるデシカントシステムとアースチューブシステムの性能評価、地中熱ヒートポンプシステムの性能評価、室内温熱環境、室内空気環境に関する研究について研究発表を行いました。また、ソウル大学校の新築図書館とソウル市役所の見学会を行いました。研究発表後、食事や懇親会でソウル大

学校の研究室の皆様と楽しい時間を過ごすことができました。本分科会の開催により、両大学だけではなく他大学も含め、本研究分野に関連した研究交流が可能になりました。今後の持続的な交流を促進する意味でも効果的な機会でした。今後も、研究・教育の発展のために持続的な交流を行い、来年は本学で第4回シンポジウムを行う予定です。



会場での集合写真



ソウル大学校の新築図書館前での集合写真



ソウル市役所の見学の様子



## 分科会13

## The 11th SNU-HU Joint Symposium on Mechanical and Aerospace Engineering

第11回機械工学と航空工学に関するシンポジウム／工学研究院 教授 大橋俊朗

11月26日（木）にソウル大学校工科大学において、分科会として「第11回機械工学と航空工学に関するシンポジウム」を開催しました。当日のソウルは日中には小雪が舞い底冷えのする寒い1日となりました。

ソウル大学校側代表者のProf. LEE Soogab, オーガナイザのProf. KO Seung Hwan, 本学側代表者の大島伸行教授, オーガナイザの大橋俊朗教授が中心となり、教員による口頭発表（ソウル大学校5件, 本学5件）及び学生によるポスター発表（ソウル大学校8件, 本

学6件）を行い、両大学から約30名の参加者を得て盛況な会議となりました。超高圧下の水素の燃焼現象からマイクロフルイデイクスによる単細胞解析まで、幅広い研究分野の発表が行われました。

午後には自動車エンジンに関する研究施設のラボツアーを行いました。現代自動車の寄付による施設は大変充実しており、特にエンジンの構造を断面から可視化した展示は興味深いものでした。また昼食と夕食を兼ねた懇親会を準備していただき、研究交流に加え

て大いに親睦を深めることができました。当分科会は毎年開催しており、今後も継続して開催する予定です。



ソウル大学校側オーガナイザ Prof. KOによる事前説明

## 分科会14

## Present Situation and Future Perspective on Crop Production in Japan and Korea

日韓における作物生産の現状と将来展望／農学研究院 特任教授 岩間和人

11月27日（金）午後に開催した分科会は、ソウル大学校農業・生命科学大学（CALC, College of Agriculture and Life Science）のJYUNG Chyul-Young 学長による開会挨拶によって開始され、本学側が4名、CALC側が4名、計8名による講演（各30分）が行われました。各講演では、日韓両国における作物栽培と育種の現状、最新研究の内容紹介、及び将来展望が報告され、参加者は両国での農業及び研究の状況と問題点を詳細に把握することができました。本シンポジウムはすでに18回の長きにわたり開催されてきましたが、植物科学分野に関する分科会は初めてであり、分科会の講演によって両国での作物生産の現状を把握でき、両国の農業が抱えている問題を解決する

ために、両大学間で植物科学分野の教員と学生の交流を活発に行うことが重要であると思われました。

分科会終了後に開催された両大学の分科会講演者を中心にした交流会において、参加者全員が今回の分科会が大変有意義であったことを確認し、次年度以降も分科会を継続することで合意しました。本学が当番校として開催す

る次年度のシンポジウムでは、今回参加した農学研究院の貴島祐治教授（植物育種学）がオーガナイザーとなり、CALCと分科会を開催する予定です。なお、ソウル大学校は韓国のトップ大学であり、教員と学生の能力は極めて高いので、交流を継続することは、本学にとって得ることが多いと考えられます。



分科会終了後の参加者の集合写真



ソウル市内観光での貴島教授とCALC大学院生の記念写真

分科会15

## Application of Cutting Edge Science to Veterinary Clinical and Applied Sciences

最先端の獣医科学からみる臨床応用へのエビデンス／獣医学研究科長 稲葉 睦

本分科会は、11月27日（金）午前9時から正午まで、ソウル大学校獣医科大学のSchofield Hallにおいて開催しました。ソウル大学校の木村順平教授が司会をつとめ、ソウル大学校獣医学部長のKIM Jae Hong教授並びに本学獣医学研究科長の稲葉 睦教授から開会の挨拶がありました。シンポジウムでは、本学から4名、ソウル大学校から3名の合計7名の教員が講演を行い、最先端の獣医学研究及びその臨床応用展開について議論しました。本年度のシンポジウムはソウル大学校獣医科大学のEducation, Research and Development Day（教育、研究と開発の日；大学院生の研究発表会）と共同開催され、午後は約80名のソウル大学校大学院生が口頭あるいはポスターで研究内容を発表し、活発な討論が展開されました。また、木村教授による附属動物

病院の案内が行われ、ソウル大学校の獣医療を見学しました。シンポジウム後の懇親会では、今後の開催方法等について意見を交換しました。

来年度以降は、大学院生による発表等も視野に入れ、引き続き最先端の獣医学研究をトピックに取り組んでいく予定です。本分科会の開催にあたりご尽力をいただいた両大学の皆様に、心よりお礼申し上げます。



懇親会における意見交換



分科会参加者

分科会16

## Compressed Modernity and Liberalism in Asia

アジアにおける圧縮された近代とリベラリズム／文学研究科 准教授 ホメリヒ・カローラ

18回目を迎えた本分科会は、本学から3名、ソウル大学校から5名が参加して11月27日（金）にソウル大学校で行いました。今回のテーマ「アジアにおける圧縮された近代とリベラリズム」に関して、日韓独仏から集った社会学者が相互に意見交換を行い、活発な討議がなされました。

シンポジウムでは、日本と韓国には共通する歴史的・社会的課題があり、特にリスクに対する認知とウェルビーイングに関わる問題について、将来的により緊密な意見交換をしていく必要が認識されました。特に、HAN Sang-

Jinソウル大学校名誉教授、そして本学の高幣秀知名誉教授による発表はともに極めて刺激的で、参加者の間では既に来年の討議に向けた問題意識が育まれているようでした。

さらに、今年は韓国・日本のみならず、ドイツ（ホメリヒ・カローラ 本学文学研究科准教授）やフランス（カンパニョーロ・ジル フランス中央科学研究所研究専任教授）からの参加者があり、より国際的な視点から議論を行うことができました。今回のシンポジウムは今後のさらなる発展が期待される、大変意義深いものとなりました。



集合写真



高幣名誉教授の発表後の質問会

## 分科会17

## 3rd HUH-SNUH-SHH Joint Symposium

第3回北海道大学病院－ソウル大学病院ジョイントシンポジウム／北海道大学病院長 寶金清博

11月26日（木）に、ソウル大学病院がん病院講堂において「第3回北海道大学病院－ソウル大学病院ジョイントシンポジウム」を開催しました。今回も昨年度に引き続き、本院と部局間交流協定を締結している台北医学大学双和病院（台湾）が特別参加しました。

分科会はソウル大学病院の吳秉熙病院長、本院の寶金清博病院長、台北医学大学双和病院の林家瑋副病院長による挨拶で始まり、「Translational Research to Clinic and Industry（医学における産学の橋渡し研究）」というテーマのもと、「Promotion of Translational Research（橋渡し研究の推進

に向けて）」「Clinical Research and Biobank（臨床研究とバイオバンク）」「Clinical Translation of Stem Cell Therapy（幹細胞治療の橋渡し研究）」と題した3つのセッションから構成されました。各セッションの終わりには、各大学の特徴的な研究内容についてはもちろん、橋渡し研究における「倫理」についても活発な質疑応答が行われ、貴重な意見交換の場となりました。

分科会終了後には、ソウル大学病院ツアーとして、7月に竣工したばかりのCenter for Medical Innovation（メディカル・イノベーション・センター

の見学を行いました。地上4階、地下5階からなる最先端研究施設の見学は大変参考となるものでした。その後の懇親会では終始和やかな雰囲気の中、専門分野を超えて情報交換を行い、来年度の本学での第4回ジョイントシンポジウム開催を約束し、終了しました。

今回のシンポジウムを踏まえ、本院においても橋渡し研究を一層加速すること、そして東アジアにおける主導的役割を担うべく3大学間のネットワークをさらに強化していくことが期待されます。



分科会参加者による集合写真



寶金病院長による挨拶



院内ツアーの様子

## 分科会18

## Russian Culture : Daily Life and Festivity

ロシア文化：日常と祝祭／スラブ・ユーラシア研究センター長 田畑伸一郎

本分科会は12月19日（土）の午後1時から同6時までソウル大学のロシア・東欧・ユーラシア研究所において、同研究所と本学スラブ・ユーラシア研究センターの共催で開催しました。文学・民俗学・宗教学・芸術学にまたがる学際的な観点からロシア文化についての議論が行われました。

本学からは、望月哲男特任教授が帝政ロシア期の写真を題材にして視覚的な記憶について論じ、越野 剛准教授はソビエト連邦の学校のフォークロアについて、高橋沙奈美助教は革命後に処刑されたニコライ皇帝一家の遺骨や埋葬地をめぐる記憶の対立について報

告しました。ソウル大学側は、SEO Kwang Jin講師が18世紀知識人の自殺観について、BYUN Hyun Tae所長とAKHMETSHIN Ruslan客員教授（モスクワ国立大学）はロシア文化の祝祭性についてそれぞれ包括的な報告を行い

ました。計6本の報告それぞれに討論者が用意され、議論を深めることができました。分科会にはソウル大学の教員・大学院生の他、韓国外国語大学などソウル市内の他大学の教員も訪れ、総勢で20名以上が参加しました。



研究報告



集合写真

分科会19

Understanding & Managing Risks of Short-Term Study Abroad Programs

短期留学プログラムにおけるリスクの理解と管理 / 国際本部長 上田一郎

11月27日（金）に、ソウル大学校国際協力本部と本学国際本部の分科会を、ソウル大学校国際協力本部応接室で開催しました。様々な形態で学生の受入、派遣が進むにつれ、世界の情勢不安や自然災害に関わるリスクはいや増えています。両大学の学生の国際交流体験の目玉でもある、短期プログラム中に伴うリスクの理解と管理について、互いの事例と対応策を紹介し、意見交換が行われました。

ソウル大学校からはCHO Seung Ah Theresa副本部長が、海外協定大学に滞在し社会・文化経験を積む短期派遣プログラムSNU in World Series等を基に、派遣前の言語強化プログラムを

含めたリスク管理や派遣先での学生の安全衛生管理について、また受入学生の健康管理や現地生との繋ぎについて説明しました。本学からは、ファースト・ステップ・プログラム担当の国際教務課の正木幹生講師が、同プログラムのリスク管理体制について、8月の



分科会の様子

タイ王国バンコク爆破テロ事件等における対応事例を説明しました。限られた時間ではありましたが質疑も活発に行われ、今後も国際業務を行うにあたっての課題に係る情報共有や意見交換を行う場となることが期待されます。



上田本部長とCHO副本部長

第1回サステイナブルキャンパス賞2015（大学運営部門）を受賞



受賞報告後、総長室で記念撮影（左から山口総長、三上理事・副学長）

サステイナブルキャンパス推進協議会（CAS-Net JAPAN）※は、持続可能な環境配慮型社会の構築に貢献した国公私立大学等の取組事例を評価し、特に優れているとして、本学の活動を栄えある第1回目のサステイナブルキャンパス賞（大学運営部門）に決定しました。

本学では、平成22年に総長直属の運営組織としてサステイナブルキャンパス推進本部（本部長：三上 隆理事・副学長）が設置され、「大学と社会が一体となって持続可能な社会の実現を

目指すため、大学キャンパスがその社会モデルの場となる」として、学生・教職員が多様な活動を展開しています。

今回の受賞は、サステイナブルキャンパス推進本部が開発した、サステイナブルキャンパス評価システム（ASSC：アスク, Assessment System for Sustainable Campus）が、他大学への応用が可能であること、及びAASHE（Association for Advancement of Sustainability in Higher Education）やISCN（International Sustainable Campus Network）等の国際的機関を通じて世界へ発信するなど、

世界水準の活動が評価されたものです。

11月13日（金）に千葉大学で開催されたCAS-Net JAPAN2015年次大会で授賞式が行われ、佐藤直樹会長（京都大学理事・副学長）から表彰状と記念の盾を授与されました。後日、山口佳三総長、徳久治彦理事・事務局長へ受賞を報告し、サステイナブルキャンパスの活動を一層推進するよう激励を受けました。

最後に、サステイナブルキャンパス推進本部の活動について、本学構成員各位の日頃のお力添えに感謝いたしますとともに、今後一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

※サステイナブルキャンパス推進協議会（CAS-Net JAPAN）：

法人会員・個人会員登録状況

（平成27年11月10日現在）

法人会員：計34法人

個人会員：計89名

（サステイナブルキャンパス推進本部）

# 大学入試センター試験の実施

平成28年度の大学入試センター試験が、1月16日（土）・17日（日）の両日、全国一斉に実施されました。

本学においても、大学入試センター試験実施体制により、実施本部、総務部、試験場部、救急医療部、連絡部及び広報部を設置し、本学教職員等延べ

約1,300人の協力を得て、平穩のうちに終了しました。

全国の志願者は、前年度より4,636人増加し563,768人でした。道内の志願者は、前年度より72人増加し18,771人となりました。

本学が担当する試験場（藤女子大

学試験場を含む）の志願者数は、昨年より58人少ない5,431人で、各試験場（会場）の受験状況は次のとおりです。

（学務部入試課）

## 平成28年度大学入試センター試験受験状況

日程 教科	1月16日（土）										1月17日（日）								
	地理歴史、公民		国語		外国語【筆記】		英語【リスニング】		英語【リスニング】再開テスト		理科①		数学①		数学②		理科②		
	受験した者の人数	欠席した者の人数	受験した者の人数	欠席した者の人数	受験した者の人数	欠席した者の人数	受験した者の人数	欠席した者の人数	受験した者の人数	辞退した者の人数	受験した者の人数	欠席した者の人数	受験した者の人数	欠席した者の人数	受験した者の人数	欠席した者の人数	受験した者の人数	欠席した者の人数	
北海道大学試験場	農学部会場	601	413	188	529	72	514	87	451	150		136	465	270	331	137	464	75	526
	人文・社会科学総合教育研究棟会場	744	700	44	712	32	719	25	717	27		21	723	687	57	672	72	667	77
	理学部会場	384	345	39	368	16	364	20	355	29		322	62	341	43	313	71	0	384
	工学部会場	672	612	60	634	38	624	48	612	60		44	628	481	191	440	232	424	248
	高等教育推進機構A会場	810	757	53	775	35	787	23	784	26		694	116	764	46	729	81	56	754
	高等教育推進機構B会場	991	942	49	946	45	945	46	939	52		0	991	940	51	939	52	939	52
	保健科学研究院会場	382	192	190	324	58	328	54	317	65		265	117	290	92	199	183	0	382
	高等教育推進機構N会場	10	6	4	7	3	7	3	7	3		3	7	7	3	6	4	4	6
藤女子大学試験場	500	357	143	445	55	451	49	443	57		393	107	400	100	317	183	0	500	
札幌地区 小計	5,094	4,324	770	4,740	354	4,739	355	4,625	469		1,878	3,216	4,180	914	3,752	1,342	2,165	2,929	
		84.9%	15.1%	93.1%	6.9%	93.0%	7.0%	90.8%	9.2%		36.9%	63.1%	82.1%	17.9%	73.7%	26.3%	42.5%	57.5%	
北海道大学水産学部試験場	337	319	18	318	19	319	18	319	18		207	130	310	27	292	45	166	171	
合計	5,431	4,643	788	5,058	373	5,058	373	4,944	487		2,085	3,346	4,490	941	4,044	1,387	2,331	3,100	
		85.5%	14.5%	93.1%	6.9%	93.1%	6.9%	91.0%	9.0%		38.4%	61.6%	82.7%	17.3%	74.5%	25.5%	42.9%	57.1%	

※欠席した者には当該教科を「受験しない」と申請し登録していない者も含まれる



受験風景

# 北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動することとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報	17,679件	3,061,495,745円
基金累計額 (12月31日現在)	教職員の寄附率	35.9% (1,423件/3,962人)

## 12月のご寄附状況

法人等3社、個人738名の方々から7,898,010円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいているの方々のご芳名、銘板の掲示について掲載させていただきます。(五十音別・敬称略)

### 寄附者ご芳名 (法人等)

株式会社田中組、寺田医院、トキワ機械

### 寄附者ご芳名 (個人)

合川 正幸	青木 雄二	朝倉 清高	浅野 賢二	石山 喬	石渡 英夫	磯部 熙郎	入江 邦彦
入澤 秀次	岩下 明裕	梅本 幸男	海老塚 基	大久保盛厚	小内 透	小野 洋之	小原 大和
帰山 雅秀	柏崎 博久	片山 明石	金川 眞行	神谷 義紀	河本 充司	木本 敦	熊井 敏文
小松 寿幸	今野 敬太	齋藤 健一	斉藤 久	桜井 謙介	桜庭 浩真	三升畑元基	志藤 光男
渋谷 正人	清水 智之	神保 重孝	鈴木 英一	須田 孝徳	瀬名波栄潤	曾我部剛男	鷹野 正義
高橋 幸夫	高橋 隆司	丹野千枝美	土家 琢磨	土屋 俊彦	寺澤 陸	時田 保夫	豊田 威信
長尾 敬志	鳴海 晃	鳴海 勇蔵	名和 豊春	橋本 秀夫	平井 喜郎	船津 秀樹	古川 浩司
彭 秀実	細川 雅史	南本 俊之	村上 明	森脇 栄一	柳田 節	山内 隆嗣	山崎 初男
吉崎 正人	吉田 広志	吉田 学					

## 銘板の掲示 (20万円以上のご寄附)

### (法人等)

株式会社田中組

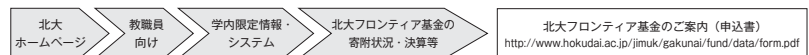
### (個人)

南本 俊之、森脇 栄一

### ご寄附のお申し込み方法

#### ①給与からの引き落とし

申込書は、本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし、ご記入の上基金事務室に提出してください。



#### ②郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡します。

#### ③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、事務局財務部経理課収入担当にご持参ください。申込書は、本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか、各局事務担当及び事務局財務部経理課収入担当にご用意していますので、ご利用ください。

#### ④クレジットカードでのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ (<http://www.hokudai.ac.jp/fund/form.html>) のクレジットカード寄附申込フォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 基金事務室 (事務局・学内電話 2017)

(総務企画部広報課)

## 平成27年度補正予算（第1号）案（本学関係分）の主要事項

平成27年度補正予算（第1号）案（本学関係分）の主要事項は、次のとおりです。

事 項	摘 要
第1号（平成27年12月18日閣議決定） 【設備整備費補助金】 ○水蒸気噴火機構解明設備	理学研究院

（財務部主計課）

## 平成28年度予算案（本学関係分）の主要事項

平成28年度予算案（本学関係分）の主要事項は、次のとおりです。

事 項	摘 要
（平成27年12月24日閣議決定）	
<b>【機能強化経費】</b> ○機能強化促進分 ○全国共同利用・共同実施分 ○教育関係共同実施分 ○設備サポートセンター分 ○基盤の設備等整備分 ○附属病院機能強化分 ○寄附金等外部資金活用促進経費	19件 11件 5件 1件 1件 1件 1件 1件 <span style="font-size: 2em; vertical-align: middle;">}</span> 計39件 内訳は次頁のとおり
<b>【施設整備事業】</b> ○環境資源バイオサイエンス研究棟改修 施設整備等事業（PFI事業14-12）	〈 12,940㎡ 〉
○工学部土木棟改築 〈国債2-2〉	〈 4,380㎡ 〉
○獣医学研究科動物施設 〈国債2-1〉	〈 1,490㎡ 〉
	※ 〈（ ）〉は全体改修面積、〈 〉は全体新営面積を表す。

平成28年度機能強化経費内訳

【機能強化促進分】

事 項	部 局 等 名	事業期間
<p>[戦略①] 持続可能社会の実現に向けた世界トップレベル研究推進・社会実装</p> <p>次世代省エネを指向した強発光性の希土類錯体ポリマー開発 -新規エレメントカップリング反応を鍵とするフォトニック錯体工学拠点の形成-</p> <p>次世代ポストゲノム科学を活用した早期診断・予防法の実証的展開研究教育拠点の形成</p> <p>ソフト&amp;ウェット材料が拓くライフイノベーション -高分子材料科学と再生医学の融合拠点形成-</p> <p>量子医理工学による創造的医療研究 -再発の心配のないがん治療への挑戦-</p> <p>人獣共通感染症克服に向けたイノベーション創出</p> <p>アイヌ・先住民との文化的共生に関する総合的・実践的研究</p>	<p>工学研究院, 理学研究院, 総合化学院, 地球環境科学研究院, 創成研究機構</p> <p>先端生命科学研究院</p> <p>創成研究機構, 先端生命科学研究院, 医学研究科</p> <p>国際連携研究教育局 (GI-CoRE), 医学研究科</p> <p>国際連携研究教育局 (GI-CoRE), 人獣共通感染症リサーチセンター</p> <p>アイヌ・先住民研究センター</p>	<p>H28~H30</p> <p>H28~H29</p> <p>H28~H29</p> <p>H28~H30</p> <p>H28~H30</p> <p>H28~H33</p>
<p>[戦略②] 最先端の国際連携研究拠点の構築と、次代を担う人材の育成</p> <p>世界の課題解決に貢献するグローバル頭脳循環拠点の構築</p> <p>ソフトマター国際連携研究教育拠点の構築：ソフトマター国際大学院の設置に向けて</p> <p>ビッグデータとサイバーセキュリティの分野融合研究拠点の構築とITトップ ガン人材の育成 ~最先端研究と新学院構想~</p>	<p>国際連携研究教育局 (GI-CoRE), 医学研究科, 人獣共通感染症リサーチセンター</p> <p>先端生命科学研究院</p> <p>情報科学研究科</p>	<p>H28~H31</p> <p>H28~H32</p> <p>H28~H33</p>
<p>[戦略③] 国際社会の発展に寄与する指導的・中核的人材の育成</p> <p>「観光メディア学院」(仮称)設置を目指して ~メディア・観光学の異分野融合型教育による創造的人材の育成へ向けて~</p> <p>持続的資源系人材育成プログラム</p> <p>難治性疾患に立ち向かうバイオ融合医薬開発をモデルとする人材育成プラットフォーム構築</p> <p>死因究明等を担う法医学的知識を有する人材育成プラン</p> <p>熱帯アジア新興農業地域における生産基盤開拓新技術の現地教育研究拠点形成 -主体的な学びと社会実装をめざした北大伝統の研究資産の再統合-</p>	<p>メディア・コミュニケーション研究院</p> <p>工学研究院</p> <p>薬学研究院, 医学研究科, 遺伝子病制御研究所</p> <p>医学研究科</p> <p>農学研究院</p>	<p>H28~H33</p> <p>H28~H33</p> <p>H28~H29</p> <p>H28~H32</p> <p>H28~H32</p>
<p>[戦略④] 4つの基本理念に基づく多様な人材育成のための全学的教育システム改革</p> <p>オープンエデュケーションを活用した先進的教育改革の拠点 (オープンエデュケーションセンター)の機能強化</p>	<p>高等教育推進機構</p>	<p>H28~H31</p>
<p>[戦略⑤] 国内外の地域や社会の活性化及び新たな価値の創造に貢献</p> <p>博士人材キャリア構築支援プラットフォームのグローバル化事業 -世界から集まる優秀な博士人材が日本及び世界で活躍するためのグローバルなキャリア支援を目指して-</p>	<p>高等教育推進機構</p>	<p>H28~H31</p>
<p>小 計</p>	<p>16件</p>	
<p>大学間連携共同教育推進事業</p> <p>教学評価体制 (IRネットワーク) による学士課程教育の質保証</p> <p>国立大学改革強化推進事業</p> <p>札幌農学校の伝統を活かしたパイオニア人材教育機能の強化</p> <p>未来型人材育成選抜機構の設立</p>	<p>高等教育推進機構</p> <p>農学研究院</p> <p>高等教育推進機構</p>	
<p>小 計</p>	<p>3件</p>	
<p>合 計</p>	<p>19件</p>	

【共通政策課題分】

<全国共同利用・共同実施分：拠点認定分>

事 項	部 局 等 名	事業期間
<p>低温科学研究の推進 -学際的・分野開拓型低温科学の新展開-</p> <p>感染癌の先端的共同利用・共同研究の推進</p> <p>エネルギー・資源シフトを実現する触媒科学のグローバル共同研究拠点事業 -持続可能社会実現のための触媒科学研究拠点構築と人材育成-</p> <p>スラブ・ユーラシア地域研究にかかわる拠点</p> <p>人獣共通感染症研究拠点基盤事業</p> <p>北極域研究の推進 -異分野連携による革新的展開-</p>	<p>低温科学研究所</p> <p>遺伝子病制御研究所 触媒科学研究所</p> <p>スラブ・ユーラシア研究センター</p> <p>人獣共通感染症リサーチセンター</p> <p>北極域研究センター</p>	<p>H28~H33</p> <p>H28~H33</p> <p>H28~H33</p> <p>H28~H33</p> <p>H28~H33</p>
<p>計</p>	<p>6件</p>	

<全国共同利用・共同実施分：プロジェクト分>

事 項	部 局 等 名	事業期間
<p>人・環境と物質をつなぐイノベーション創出ダイナミック・アライアンス</p> <p>血管を標的とするナノ医療の実用化に向けた拠点形成 -がんを始めとする国民病を血管から治療する-</p> <p>統合物質創製化学研究推進機構</p> <p>感染症制御に向けた研究・人材育成の連携基盤の確立 -人獣共通感染症克服に向けたイノベーション創出と地球規模の感染症対策-</p> <p>北極域の持続可能性の実現に向けたイノベーション創出 -ロシア拠点を核とした産官学連携と人材育成-</p>	<p>電子科学研究所</p> <p>遺伝子病制御研究所, 薬学研究院, 北海道大学院</p> <p>触媒科学研究所</p> <p>人獣共通感染症リサーチセンター</p> <p>北極域研究センター</p>	<p>H28~H33</p> <p>H28~H30</p> <p>H28~H33</p> <p>H28~H33</p> <p>H28~H33</p>
<p>計</p>	<p>5件</p>	



## &lt;教育関係共同実施分&gt;

事 項	部 局 等 名	事業期間
水産科学・海洋環境科学教育推進のための練習船プログラムの普及と中核的拠点の展開	水産学部	H28～H32
食糧基地、北海道の水圏環境を学ぶ体験型教育のための中核的拠点形成 ～多様な水産資源を育む環境でのフィールド教育～	北方生物圏フィールド科学センター	H28～H31
FSDS共同推進事業 ～PFUプログラムによる大学リーダーの養成～	高等教育推進機構	H28～H31
フィールドを使った森林環境と生態系保全に関する実践的教育のための中核的拠点形成	北方生物圏フィールド科学センター	H28
寒流域における海洋生物・生態系の統合的教育のための中核的拠点形成	北方生物圏フィールド科学センター	H28
計	5件	

## &lt;設備サポートセンター整備&gt;

事 項	部 局 等 名	事業期間
グローバルファシリティセンター ～先端機器共用促進・グローバル技術支援人材育成拠点構築～	創成研究機構	H28～H30
計	1件	

## &lt;基盤的設備等整備分&gt;

事 項	部 局 等 名	事業期間
医療情報ネットワークシステム	北海道大学病院	
計	1件	

## &lt;附属病院機能強化分&gt;

事 項	部 局 等 名	事業期間
地域医療拠点体制充実支援経費等		
計	1件	

## &lt;寄附金等外部資金活用促進経費&gt;

事 項	部 局 等 名	事業期間
寄附金等外部資金活用促進経費		
計	1件	

(財務部主計課)

## 取引先を対象に「調達制度に関する説明会」を開催

財務部調達課では、11月30日（月）・12月1日（火）の両日、本学と取引基本契約を締結している取引先を対象とした「平成27年度調達制度等に関する説明会」を学術交流会館で開催しました。

この説明会は、研究費の不正使用防止を目的として、平成24年度から年2回定期開催しており、今年度は5月の説明会に続いて2回目となりました。

初日は、テレビ会議システムを利用して函館キャンパスと結び、道内の取引先の営業担当者、経理担当者等が両日合わせて511名出席しました。

説明会では、財務部調達課の担当者

から「教員等による発注」「納品検収」「不正行為」等に関して具体的な事例を踏まえた説明を行い、国民からあらゆる誤解や疑念を持たれることなく、また社会等に対する説明責任が果たせ

るように、改めて本学の調達制度を十分に熟知していただき、適正な取引に当たるよう改めて理解を求めました。

（財務部調達課）



説明会の様子（学術交流会館）



説明会の様子（函館キャンパス）

## 第12回国立大学法人等監事協議会総会の開催

12月4日（金）午後、工学研究院フロンティア応用科学研究棟鈴木章ホールを会場に、第12回国立大学法人等監事協議会総会が開催されました。本学を会場として総会が開催されたのは、今回が初めてです。

国立大学法人等監事協議会は、平成16年の国立大学法人化を機に、監事の監査機能の充実及び業務運営の適正化を目的として組織されたもので、86の国立大学法人及び4の大学共同利用機関法人の監事180名により構成されています。

総会では、同協議会会長である本学の米澤 勉監事の進行により、各監事

間の情報共有、意見交換等を目的として開設された公式ホームページについての報告や、平成26年6月の大学関連法の改正と平成27年4月からの施行を受けて、これまで監事協議会検討会が改定作業を実施してきた「監事監査に関する指針」についての説明等が行われました。

また、休憩を挟み、本学文学研究科の櫻井義秀教授による、「教育・研究組織のハラスメント対策と課題—学生支援体制を如何に充実させるのか」と題した講演や、文部科学省高等教育局国立大学法人支援課の石橋 晶課長補佐による、「国立大学法人等を取り巻

く最近の動向について」の講演、さらに一般社団法人国立大学協会の木谷雅人常務理事・事務局長による、「国立大学協会の活動状況について」の説明が行われ、全国から集った130名余の監事は、法令改正により国立大学法人等の監事機能の強化が図られたことも踏まえ、熱心な質疑等を行っていました。

総会終了後には、工学部食堂に会場を移して情報交換会が行われ、和やかな雰囲気のもと、監事同士の交流を深めました。

（監査室）



総会会場の様子



櫻井文学研究科教授による講演



石橋文部科学省国立大学法人支援課課長補佐による講演

## 「平成27年度冬山登山講習会」を開催

11月26日（木）午後6時30分から、情報教育館3階スタジオ型多目的中講義室において、冬山登山講習会を開催しました。本講習会は、学務部が冬山登山の事故防止のために、毎年山系の公認学生団体と実施しているもので、今回は体育会山スキー部（顧問：経済学研究科 米山祐司教授）の協力のもと、阿部幹雄氏（株式会社極食代表取締役）を講師に招き、開催しました。

阿部氏は、国内外での豊富な登山経験から、雪崩の科学的知識や救助法啓蒙や山岳遭難の救助に関する社会貢献活動に携わられているとともに、南極地域観測隊セール・ロンダーネ山地学調査隊のフィールドアシスタントとして、装備・食料・安全管理を担当された経験があります。

講習会では「極地で学んだ命の守り方」と題し、ヒマラヤ遭難及び南極地域観測隊参加などの体験から、登山における責任について考え、ひとりも怪我させず、ひとりも失わないで帰国することを目標に安全を保ち、命を守る方法とは何かを講演いただきました。

参加した126名の学生・教職員・一般市民は、遭難体験談での阿部氏の心境やご遺族の話に心を打たれ、南極のブリザードやオーロラなどの貴重な音源・映像を楽しみつつ、危機感を持ちながら行動することや食事等によるストレス解消、組織体制、装備の重要性などを認識し、安全な冬山登山について決意を新たにしていました。

（学務部学生支援課）



講演を行う阿部氏



会場の様子

## 「北海道地区FD・SD推進協議会」総会を開催

「北海道地区FD・SD推進協議会」の第6回総会を12月17日（木）に学術交流会館において開催しました。

当協議会は、参加校である道内50の大学・高等専門学校が連携・協同して、FD、SD及びTAD\*の推進に係る情報の交換・共有やプログラムの共同開発を目的として、平成21年10月に設立され、本学が代表幹事校を務めています。

総会の第1部（午前の部）には、関係者約40名が出席し、新田孝彦理事・副学長の挨拶に続き、木村 純高等教育推進機構特任教授による「大学職員セミナーの10年」と題した講演が行われ、出席した関係者は熱心に聞き入っていました。また、講演後には、活発な質疑応答がなされました。

その後、総会の議事が行われ、本学高等教育推進機構高等教育研修センターが教育関係共同利用拠点に認定さ

れ、今後の北海道の大学等におけるFD・SDの発展・充実の一助となるよう努めていくことが報告されました。

第2部（午後の部）には、35名が出席し、FDやSDに関する諸問題についてテーマ別セッションが行われました。

テーマ別セッションでは、FDやSDに関してそれぞれの大学等が抱えている現状や課題について、3つのテーマ（「FD・SDにおけるPDCAサイクルについて」「アクティブ・ラーニング

その後」「SDの動向について」）に分かれて事例等を報告し、討議が行われました。参加者にとってFDやSDについて理解を深める良い機会となりました。

\*TAD（Teaching Assistant Development）

ティーチング・アシスタント（TA）の教育能力向上のための組織的取組み。

（学務部学務企画課）



総会の議事の様子



テーマ別セッションの様子

## 講演会「優秀な留学生の獲得に向けて」を開催

12月3日（木）、国際本部では、立命館大学のモンテ カセム理事補佐・教授を講師にお迎えし、「優秀な留学生の獲得に向けて」をテーマに講演いただきました。

本学は、平成38年に創基150年を迎えるにあたり、「世界の課題解決に貢献する北海道大学へ」というビジョン

を掲げています。今回は、このビジョン達成のために必要な「徹底した国際化」に欠かせない、優秀な留学生確保のための戦略並びに施策等について伺いました。

カセム教授からは、立命館アジア太平洋大学の学長を務められたご自身の経験を踏まえ、熱のこもったお話や本

学への助言をいただきました。講演後もカセム教授と参加者との活発な意見交換が続き、講演会は盛況のうちに終了しました。

（国際本部国際連携課）



熱のこもったカセム教授のご講演



熱心に聞き入る参加者

## 留学生のための救命講習会を開催

12月9日（水）、留学生のための救命講習会を、北消防署幌北出張所、北消防団鉄西分団の協力のもと開催しました。中国、マレーシア、ドイツ、インド、ブラジル、ベトナムなど様々な国からの留学生が参加し、心臓マッサージや人工呼吸の方法とAEDの使い方を学びました。

まず最初に、救命処置の一連の流れを英訳付きで説明したDVDを全員で視聴しました。このDVDは2年前に本学学生が消防団と協力して作成した

ものです。視聴後は、人形を使って心臓マッサージや人工呼吸のやり方、AEDの使い方を実践練習しました。消防士や消防団員の熱心な指導のもと、細かい注意点を含め真剣に学びました。

参加者の中には母国で救命訓練を受けたことのある留学生や日本で運転免許証を取得する際に習ったことのある留学生もいましたが、大多数にとっては初めての講習会でした。

「日本では119番通報をしてから救

急車が到着するまでの平均時間は6分ですが、一人で心臓マッサージを6分間続けるのは大変です。今後、自分の周りで倒れて救命処置を施されている人がいたら、積極的に交代を名乗り出しましょう」との消防士の説明に、実際に体全体を使って行う心臓マッサージを体験した留学生達は大きく頷いていました。

（国際本部国際交流課）



AEDの使い方を実習する参加者



心臓マッサージの練習

## 研究者のためのスキルアップセミナー⑦ 「読む読まないはタイトルで決まる」を開催

12月3日（木）、フロンティア応用科学研究棟1階セミナー室において、研究者のためのスキルアップセミナー⑦「読む読まないはタイトルで決まる」を開催しました。

当セミナーは、研究大学強化促進事業の一環として、研究者が成果等を社会に発信する際に必要となるスキルの向上のために、平成25年度より実施しています。

第7弾となる今回は、一般の方々が読むホームページやパンフレットに研究紹介などを書く際に、より多くの方の興味・関心を引くことができる効果的な「タイトル」や「リード文」のつ

け方を学ぶことを目的としました。

「本文を読みたくなるタイトルの作り方」と題して、広告文章作りに長年向き合ってきたコピーライターの佐々木葉子氏に、ご講演いただきました。

セミナーは、網塚 浩総長補佐の挨拶から始まり、佐々木氏による講義の後、参加者全員で本学の教員が書いたエッセイにタイトルを付ける演習を行いました。参加者から挙げられたタイトルについて、佐々木氏からの講評があった後、活発な質疑応答が行われ、充実したディスカッションが展開されました。

当日は教職員・大学院生を中心に80

名の参加があり、アンケートの結果、85%が内容に「満足」「まあ満足」という回答であったほか、「実例が多くわかりやすかった」「座学だけじゃなかったのが、身についた気がします」「これからも多面的な切り口での企画を期待させていただきます」などの意見も数多く寄せられ、当セミナーへの関心の高さがうかがわれました。

大学力強化推進本部、創成研究機構では、これらの意見を元に、今後の継続的なセミナー開催について検討していきたいと考えております。

（創成研究機構）



網塚総長補佐による挨拶



佐々木氏による講演



会場の様子



質疑応答の様子

## 「学生の学習を促進する少人数演習型授業のための コースデザインワークショップ」を開催

高等教育推進機構高等教育研修センターでは、国際本部留学生センターと共催し、教員に対するFDの一環として、12月5日（土）正午から午後4時30分まで高等教育推進機構S5講義室において「学生の学習を促進する少人数演習型授業のためのコースデザインワークショップ」を実施しました。

本ワークショップは、高等教育研修センターが、国際本部留学生センターから「授業で学生にディスカッションをさせる際に、学生にとってより深い学習となるにはどうすれば良いのか」といった相談を受けたことから企画したもので、本学教員3名、道内他大学

の教員6名の計9名が参加しました。

開催にあたり、国際本部留学生センターの小河原義朗准教授から挨拶があった後、高等教育推進機構高等教育研修センターの山本堅一特任准教授を講師として研修を行いました。

本研修は、「コースデザイン（15回1科目の授業設計）の基本知識」及び「学生の学習を促進する授業計画の組み立て方」に関する2つの講演と、参加者が持参したシラバスの見直し・ブラッシュアップを行うための3つのワークセッションから構成されており、自身のシラバスをブラッシュアップするため、参加者は活発に質問をし

て、熱心にワークに取り組んでいました。

参加者からは「個人ワークとグループワークがあり参加の皆さんと共有ができて良かった。質問に対して丁寧に回答いただけてとても勉強になりました」「客観的なご意見や助言をいただけたのでブラッシュアップできました」などという意見が出ており、非常に有意義なワークショップになりました。

高等教育研修センターでは、教職員を対象とした様々な研修を開催する予定ですので、積極的にご参加願います。

（高等教育推進機構）



講演中の様子



個人ワーク中、参加者が講師に質問している様子

## 「第6回北大発ベンチャー促進懇談会11月例会 ～クラウドファンディング×ITベンチャー・スタートアップ～」を実施

11月26日（木）、百年記念会館大会議室にて「第6回北大発ベンチャー促進懇談会11月例会～クラウドファンディング×ITベンチャー・スタートアップ～」を実施しました。

この懇談会の目的は、本学の教員、学生などが保有する起業計画を発掘し、支援の機会を拡大することであり、主催が本学産学・地域協働推進機構、共催が独立行政法人中小企業基盤整備機構北海道本部、後援が経済産業省北海道経済産業局、北海道、札幌市、北大リサーチ&ビジネスパーク推進協議会、一般財団法人さっぽろ産業振興財団、公益財団法人北海道中小企業総合支援センター、株式会社北洋銀行、株式会社東京大学エッジキャピタル、北海道ベンチャーキャピタル株式会社となっています。

まず、産学・地域協働推進機構の牧内勝哉副機構長の趣旨説明と挨拶から始まり、続いてショートプレゼンテーションが行われました。

「新しい資金調達トレンド」として、株式会社ACT NOW代表取締役の杉山央氏が「創業×北海道発クラウドファンディングの可能性」をテーマに発表し、次に「起業家ケーススタディ」として、Weck株式会社代表取締役の阿部卓真氏が「外国人旅行者向け美容室アテンドサービスCuwai-naー日本美髪予約ー」を、株式会社農業情報設計社

代表の濱田安之氏が「農作業（畑や田圃）に役立つ先端技術で一次産業の革新をサポート」を、株式会社タフスコポーレーション代表取締役社長の田村準也氏が「農業×IT～生産者と消費者をつなぐ架け橋に」をテーマに、それぞれプレゼンテーションを行いました。

その後、講師による対談として、「クラウドファンディング×ITベンチャーサポートで生まれる北海道の新たなITビジネス」をテーマに、杉山氏をコーディネーター、NEDO前副理事長の倉田健児氏をコメンテーターとしてディスカッションが行われました。

また、講師の皆様には第2部として、

事前もしくは当日に申し込んだ参加者からの起業及び起業経験に関する質問や相談に対応していただきました。

本懇談会は2月23日（火）にも開催する予定です。既に起業プランがある方はもちろん、漠然とした起業への思いを抱いている方も、ぜひご参加ください。

◆問い合わせ先

産学・地域協働推進機構産学推進本部  
創業デスク担当 須田

E-mail: startup@mcip.hokudai.ac.jp

内線: 9559

（産学・地域協働推進機構）



牧内副機構長の挨拶



講師対談 濱田氏（左）と田村氏



司会の浜中裕之氏（左）とコメンテーターの倉田氏



会場の様子

## 第10回アグリビジネス創出フェア in Hokkaidoに出展

11月27日（金）・28日（土）にサッポロファクトリーで開催された、第10回アグリビジネス創出フェア in Hokkaido「北海道の食と農の明日へ」に出展しました。会場では道内28機関より「食」に関する研究成果が紹介され、2日間で約1,400名の来場者がありました。当機構では農学研究院の原博教授、小関成樹准教授、水産科学研究院の宮下和夫教授の研究紹介、及び

食科学プラットフォームの取り組みについて紹介し、ブースを訪れた方々に本学の研究開発に興味を持っていただくことが出来ました。

これからも積極的に研究成果について情報発信を行い、企業との共同研究やプロジェクトの創出に繋げる活動を行って参ります。

（産学・地域協働推進機構）



ブースでの説明の様子

# 人材育成本部上級人材育成ステーションS-cubicで 第27回「赤い糸会&緑の会」を開催

人材育成本部のS-cubicでは、12月8日（火）に学術交流会館にて第27回「赤い糸会&緑の会」を開催しました。

本会は、企業と若手研究者（DC、PD）との直接情報交換会であり、企業には若手研究者の高い専門性や総合力を理解いただき、若手研究者には企業の研究開発活動や企業における博士の活躍状況等を知ってもらうことで、相互理解を深め、視野の複線化、活躍フィールドの拡大を図ることを目的としています。

今回で「赤い糸会&緑の会」は通算27回目の開催となり、若手研究者の参加も回を重ねるにつれ増加し、総合化学院、理学院、生命科学院、農学院、工学院、環境科学院、水産科学院、獣医学研究科、情報科学研究科から40名（DC39名、PD1名）、また、昨年度末より採択された「科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業」で、東北大学から2名の若手研究者が参加しました。企業からも、化学、鉄鋼、食品、繊維、機械、電気、製薬、精密機

器等の各種業界から16社（30名）、オブザーバ2社を加えると18社（34名）にご参加いただきました。

本会では、冒頭の人材育成本部長の望月恒子教授による開会挨拶、赤い糸会担当の樋口直樹特任教授による趣旨説明の後、参加企業の皆様から業界動向や博士の活躍状況等の紹介が行われ、その後、若手研究者の自己紹介ポスター発表、企業ブースを訪問しての個別情報交換等が活発に行われました。

さらに、この「赤い糸会&緑の会」を通じて企業に就職した若手研究者の先輩方が今回は3名も企業説明会に参加し、後輩達に対して熱い思いを語ってくれました。

開催後の企業側のコメントからも、「年々質が向上している」「非常に有意義だった」との声をいただくことができました。また参加した若手研究者からは、「企業の方との密なコミュニケーションが取れるので大変有意義であった」「博士がどう働くべきか考える良い機会になった」といった嬉しい

声も聞かれました。

次回2月18日（木）の第28回「赤い糸会&緑の会」にも、既に16社のエントリーが確定しており、他大学からの参加も東北大学、名古屋大学、お茶の水女子大学から予定しています。

終わりに、人材育成本部では以上の活動に加えて、企業事業所視察、Advanced COSA、J-window、キャリアパス多様化支援セミナー、キャリアマネジメントセミナー、また企業での長期インターンシップ等を通して、これまで以上に若手研究者の実践力を高めることへ注力していくとともに、コンソーシアム結成により、東北大学や名古屋大学が運営しているより多くの洗練されたプログラムを博士に提供できるようにになりましたので、今後ともご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

なお、興味のある方は人材育成本部のホームページをぜひご覧ください。

◆<http://www2.synfoster.hokudai.ac.jp>

（人材育成本部）



望月人材育成本部長の開会挨拶



樋口人材育成本部特任教授の趣旨説明



企業からの業界動向説明



説明に聞き入る若手研究者



若手研究者のポスター発表



企業との個別情報交換



## ■ 部局ニュース

# 北海道大学病院が輔仁大学外国語文學院と部局間交流協定を締結

北海道大学病院では、10月31日（土）、輔仁大学外国語文學院（台湾）と部局間交流協定を締結しました。本院からは松浦 亨病院長補佐、ピーター・シェーン国際医療部副部長が調印式に出席するため、台湾を訪問しました。本協定は教育及び研究交流の促進を図るものですが、国際医療通訳の養成に主眼を置いている点に特色があります。

また、本協定の締結を受けて、11月

27日（金）、輔仁大学から頼 振南外国語文學院長、林 肇堂医学院長をはじめとする教員団が本院を訪問しました。

寶金清博病院長との懇談では、擬態語で表現される症状を的確に通訳すること、患者さんにとっては好ましくない情報も通訳しなければならないこと等、医療通訳特有の難しさに話が及び、それらの課題克服のためにも本協定に基づいてスタッフの交流を促進していくこと等が確認されました。

懇談後には、白土博樹教授による説明のもと陽子線治療センターを、藤田勝久副技師長による説明のもと放射線部を見学いただき、動体追跡照射技術等の本院が進める最先端医療に多くの質問が寄せられました。

1月には、寶金病院長が輔仁大学を訪問し、連携強化に向けた動きを一層加速させていく予定です。

（北海道大学病院）



調印式の様子（左：松浦病院長補佐）



懇談後の記念撮影



陽子線治療センター見学を終えて

## 医学部医学科の学生がノーベル賞授賞式に出席

12月10日（木）（日本時間11日（金）未明）、スウェーデンのストックホルムで行われたノーベル賞授賞式に、医学部医学科4年生の笹森 瞳さんが出席しました。

笹森さんは、スウェーデン青年科学者連盟が毎年ノーベル賞週間にあわせてストックホルムで開催する「ストックホルム国際青年科学セミナー（SIYSS；

Stockholm International Youth Science Seminar）」に参加していました。これは、公益財団法人国際科学技術財団が毎年2名の日本人学生を派遣しているもので、笹森さんは、「世界トップレベルの研究に触れて視野を広げたい」との思いから今回応募し、選ばれたものです。

笹森さんは、授賞式のほか、記念講

演、記者会見、日本大使館主催のパーティ、レセプション、晩餐会等のノーベル賞関連行事に出席するとともに、医学生理学賞の受賞者が記念講演を行った会場で、地元の高校生に向けて、自身の研究内容の発表を行いました。

（医学研究科・医学部）



日本大使館主催のパーティにて  
（中央：2015年ノーベル物理学賞受賞 梶田隆章先生、右：笹森さん）  
（写真提供：国際科学技術財団）



日本大使館主催のパーティにて  
（中央：2015年ノーベル生理学・医学賞受賞 大村 智先生、右：笹森さん）  
（写真提供：国際科学技術財団）

## 医学研究科寄附講座「がん予防内科学講座」市民医療セミナー及び感謝状贈呈式の開催



(左2人目から) 笠原正典研究科長, 山口総長, 浅香特任教授, エーザイ株式会社の代表者



浅香特任教授

12月22日(火), 北洋大通センター4階セミナーホールにおいて, 医学研究科寄附講座「がん予防内科学講座」市民医療セミナー及び感謝状贈呈式を開催しました。

がん予防内科学講座は平成23年度に設置され, 医学の基本は病気の予防であることを念頭に置き, がんの予防, 特に消化器系がんの予防を主要な研究テーマに掲げ, 科学的観点から具体的な予防プログラムの開発に取り組みました。発足当初は特任教員1名の体制でしたが, 元北海道大学病院長の浅香正博特任教授の指導の下, 特任教授1名, 特任講師1名, 客員教員4名にまで組織を拡充し, 中央キャンパス総合研究棟で研究活動に打ち込んできました。

5年の長きにわたり活動してきたがん予防内科学講座は, 平成27年12月で設置期間の満了を迎えました。同講座

の創設時から開講してきた一般市民向けの市民医療セミナーも22日(火)が最後の開催となり, この機会を借りて, これまで同講座へ多大なるご支援をいただいたエーザイ株式会社に感謝状を贈呈することになりました。

当日はエーザイ株式会社の代表者に東京からお越しいただき, 山口佳三総長より感謝状が授与されました。山口総長は謝辞の中で, 「がん予防内科学講座を支援していただき, 研究の推進, 人材育成, 国際協力, 社会貢献に多大なるご尽力をいただいた」と深く感謝の意を述べました。

贈呈式の後には浅香特任教授が講師となり, 「市民医療セミナー5年間で振り返って-更なる発展への模索」と題したセミナーを開催しました。

がん予防内科学講座が5年間の活動を通して達成した成果は様々ですが, 講座の創設時から一貫して取り組んで

きたのは, 胃がんを中心にしたがんの一次予防の成果をがんの研究者のみならず, 一般市民に広く紹介し, お一人おひとりの健康増進に役立てていただくことです。その代表的な成果が長年好評を博してきた市民医療セミナーといえます。浅香特任教授は過去のセミナーの思い出を交えながら, 医学の興味深いエピソードをわかりやすく講演されました。

平成27年12月をもってがん予防内科学講座並びに市民医療セミナーはひとまず終了しましたが, 浅香特任教授は講演の最後で, 市民医療セミナーを今後も継続して行うことを力強く宣言され, 聴衆の間から盛大な拍手が沸き起こりました。

(医学研究科・医学部)

## スラブ・ユーラシア研究センター設立60周年記念 国際シンポジウム・祝賀会を開催

12月10日（木）・11日（金）の両日、スラブ・ユーラシア研究センター大会議室で、センター設立60周年を記念した国際シンポジウム「歴史と記憶の間：世代を超えて考える」を開催しました。20世紀の世界史のコンテクストでセンターの活動史を再考するというのが中心的なコンセプトです。プログラムの前半は、第二次大戦後の地域研究の勃興と、それに果たした米ロックフェラー財団の役割を論じながら当センターの設立時の状況を振り返るセッション「スラブ・ユーラシア研究センターの設立とロックフェラー財団」を行い、興味深い史実を紹介しました。続いてのラウンドテーブルでは、外側継男名誉教授はじめ過去に専任として勤められた諸先輩が、それぞ

れの日から見たセンターの活動史を語るという、将来の世代にとっても貴重な試みを実現しました。後半の議論は20世紀史をめぐってより広く展開され、杉原千畝の活動、1950年代の日露関係、ロシアの第一次世界大戦、チェコ共和国のユダヤ人など複数の事象が、アニバーサリー（記念年）という観点に絡めて論じられました。最終セッションは内外の諸学界、諸分野の専門家によるラウンドテーブルで、日本のスラブ・ユーラシア研究の将来をめぐって様々なビジョンや提言が発表されました。内外から約110名の参加者を得て、シンポジウムは盛況裡に終了しました。

10日（木）の夕方にファカルティハウス「エンレイソウ」で開かれた記念

祝賀会では、山口佳三総長、石崎宏明文部科学省研究振興局学術機関課学術研究調整官、和田春樹東京大学名誉教授、アンドレイ・ファブリーチニコフ在札幌ロシア総領事をはじめとする多くの方々から、祝辞が述べられました。祝賀会には、総長、理事、部局長をはじめとする本学の教職員、センターの共同研究員、他大学の研究所・センター関係者など、100名を超える出席者がありました。かつてセンターで一緒に働いた多くの教職員の皆さんが出席してくれたことは大変嬉しいことでした。祝賀会も終始和気あいあいとした雰囲気の中で終わることができました。

（スラブ・ユーラシア研究センター）



シンポジウム会場風景



記念祝賀会での山口総長の挨拶



記念祝賀会風景

## 薬学研究院・薬学部で特別講演「Nanostructured Biomaterials for Medical and Biological Applications」を開催

薬学研究院・薬学部では12月21日（月）に、シンガポールのバイオポリスにあるInstitute of Bioengineering and Nanotechnology所長のJackie Ying教授を招き、「Nanostructured Biomaterials for Medical and Biological Applications（ナノ構造化したバイオマテリアルズの医学・生命科学への応用）」と題する特別講演を行いました。

講演ではバイオマテリアルの再生医

療への応用、インテリジェントマテリアルによる薬物送達システムの開発など、広範囲にわたる最新の研究成果が紹介されました。Ying教授は現在、ベンチャー企業を創設して臨床応用を進めており、これらの功績によりイラン政府からthe inaugural Mustafa Prize “Top Scientific Achievement” Awardを授与されている研究者です。特に、血中のグルコース濃度に反応してイン

スリンを放出する刺激応答性ポリメリックナノ粒子の開発は、聴講した教員、学生たちに大きなインパクトを与えました。

参加者はYing教授の話に熱心に聞き入り、講演後の質疑応答の時間には多くの質問が寄せられ、盛況のうちに閉会となりました。

（薬学研究院・薬学部）

## 環境科学院で「若手博士人材向けのキャリア形成支援講習会」を開催

環境科学院では、教職員に対するFDの一環として、12月3日（木）午後2時30分から同3時30分まで「若手博士人材向けのキャリア形成支援講習会」を開催しました。

開催にあたり、大原 雅副学院長から今回のFDの趣旨説明があった後、人材育成本部の樋口直樹特任教授から、人材育成本部の総合若手人材育成事業（S-cubic）の活動の経緯と現在行っている施策について、環境科学院の博士後期課程学生の実態に触れながら、若手博士人材に必要なキャリア支援について講演がありました。

その後、人材育成本部の飯田良親特任教授から、国際人材育成プログラム

（I-HoP）の活動として、環境科学院在籍学生の3分の1を占める海外からの留学生に向けた英語によるキャリア支援施策について紹介がありました。

参加した本学院教員25名は、今回の研修を通じ、キャリア支援に関する最

新の情報を習得する絶好の機会となりました。研修をきっかけとし、より充実した学生へのキャリア指導を行うことが期待されます。

（環境科学院・地球環境科学研究院）



研修を行う樋口特任教授



研修を行う飯田特任教授

## 工学研究院工学系技術センター主催セミナー「ウェブサイト制作のキホンとトレンド教えます！」を開催

11月27日（金）午後3時から工学部オープンホールにおいて、ウェブデザイン・ディレクションセミナー「ウェブサイト制作のキホンとトレンド教えます！」を開催しました。本セミナーは、ウェブサイト制作に関する知識の共有・スキルアップと広報活動の活性化を目的として、工学研究院に所属する教職員・学生のほか、全学の教職員・学生を対象に、工学研究院工学系技術センターが主催して行いました。

本セミナーでは講師として、札幌を中心にウェブデザイナーとして活躍されている高橋朋代氏をお招きし、2時間にわたりご講演いただきました。高橋氏はデザインからシステム開発までトータルにウェブサイト制作に携わっており、その経験やノウハウを教えてくださいました。

事前に収集したアンケートでは、「見やすく分かりやすいコンテンツの作り方を知りたい」「自分でより良い

サイトにカスタマイズしたいので、何から始めたらよいか教えてほしい」「制作会社と一緒にウェブサイト制作する際のコミュニケーションの取り方を知りたい」といった意見が寄せられました。これらを踏まえ、高橋氏からはウェブサイト制作することにより達成したい「目的」を明確にすること、制作会社と制作イメージのみならず理念を共有して信頼関係を築くこと、デザインの基本的な考え方や最近のウェブサイト制作のトレンドといった内容について、具体例を交えて丁寧

に解説していただきました。

当日は定員100名のところ、130名が参加し、多くの温かい反響をいただいた中で盛会裡に終了しました。

工学系技術センターでは、今後も日々の教育研究活動や業務に役立つ講演会や、実用的なスキルを高めるためのハンズオンセミナーを企画していきますので、ぜひご参加いただけましたら幸いです。

（工学院・工学研究院・工学部）



講演を行う高橋氏



セミナー会場の様子

## 低温科学研究所技術部で第21回技術報告会を開催

12月11日（金）、低温科学研究所講堂において、低温科学研究所技術部・技術支援本部共催による第21回技術報告会を開催しました。

報告会では、16件（うち3件は要旨のみ）の低温科学研究所技術部が関わった研究発表や技術報告が行われました。

例年同様、専門領域を超えて、多様な分野の研究に触れる貴重な場となり、延べ30名を超える所内外の研究者・学生・技術職員が参加し、活発な意見が交わされました。また、今年度は低温科学研究所共同利用研究に採択されている名古屋大学の技術職員による研究開発の発表も行われました。

本報告会の内容をまとめた「北海道大学低温科学研究所技術部技術報告第21号」を発行しました。詳しい内容は本研究所技術部ウェブサイトでご覧いただけます。

◆<http://www.lowtem.hokudai.ac.jp/tech/>

（低温科学研究所）



渡部直樹技術部長の挨拶



名古屋大学技術職員による発表



技術報告会風景

## 北海道大学病院で「第53回ふれあいコンサート クリスマスの夕べ」を実施

北海道大学病院では12月10日（木）、アメニティホールにおいて、「第53回ふれあいコンサート クリスマスの夕べ」を開催しました。毎年、患者サービス推進委員会が中心となって色々な企画をしていますが、昨年度は天候不良のため開催を中止せざるを得ませんでした。2年ぶりの開催となった今年度は、電飾が施された高さ3mの特大クリスマスツリーや空気で膨らませたエアサンタが飾られ、見慣れた風景が華やかに彩られました。

寶金清博病院長の開会の挨拶で開幕し、引き続き札幌・ジュニア・ジャズスクール（SJF）による演奏が行われました。SJFは、小中学生からなるジャズスクールで、本院のコンサートには平成23年から出演しており、患者さんから好評を博しています。今年度は、定番のクリスマスナンバーの演奏の中で、会場全体で「ジングルベル」を合唱するなど、アメニティホールはクリスマスの雰囲気に満ちあふれました。

演奏の合間には、北海道日本ハム

ファイターズの選手のサイン入り色紙やボールを景品としたお楽しみ抽選会が、演奏終了後には子どもたちへのプレゼント配付が行われ、多くの子どもたちの笑顔が見られました。

コンサートは川畑いづみ看護部長の挨拶で幕を閉じました。職員らによる手作りのクリスマスコンサートは、訪れた人々の心に暖かな思い出を残したことと思います。

（北海道大学病院）



開会の挨拶をする寶金病院長



札幌・ジュニア・ジャズスクールの演奏



川畑看護部長による閉会の挨拶

## 総合博物館がタイ王国科学技術博覧会2015へ企画展示を出展

タイ王国科学技術博覧会2015はバンコク近郊ノンタブリ県のIMPACT展示会議場にて、11月14日（土）～25日（水）の日程で開催されました。総合博物館（HoUM）はタイ国立科学博物館（NSM）とタイ王国ブラパ大学とともに、本博覧会に企画展示「The marine animals and under water photos of Hokkaido island and Thai waters（北海道とタイの海産生物と水中写真展）」を出展しました。この展示の中で、特に目を引いたのが、HoUMからNSMへ寄贈したタラバガニの剥製です。このタラバガニは5.8kgもの大きさで、訪れた小さな子供達の中にはその迫力のあまり、泣く子もいました。

本企画展示のオープニングセレモ

ニーは15日（日）の朝から開催され、中川光弘館長（HoUM）とSakorn Chanapaithoon副館長（NSM）の挨拶の後に、テープカットが行われました。オープニングセレモニーの後は、関連講演会が開催されました。講演会は中川館長のHoUM紹介に始まり、水産科学館の矢部 衛館長による知床の浅海魚類調査に関する講演、ブラパ大学のPichai Sonchaeng教授によるタイの海洋生物の多様性に関する講演、株式会社鉄組潜水工業所の谷 敬志氏による北海道周辺の潜水調査に関する講演が行われ、100名ほどが講演に耳を傾けていました。

午後からは博覧会のグランドオープニングセレモニーが行われ、タイ王国科学技術省や各国の大使館などから多

くの関係者が参加しました。HoUMからも中川館長、矢部館長、河合俊郎助教が参加し、Pichet Durongkaverrojタイ王国科学技術大臣から中川館長へ感謝の印としてトロフィーが授与されました。セレモニー後にはDurongkaverroj科学技術大臣や佐渡島志郎在タイ王国日本国大使がHoUMの企画展示ブースを訪れました。開催期間中の訪問者は100万人を超えました。

博覧会での企画展示はHoUM、NSM、ブラパ大学及び株式会社鉄組潜水工業所の多くの方々のご尽力により、大成功に終わりました。皆様にお礼申し上げます。

（総合博物館）



企画展示のオープニングセレモニー



矢部水産科学館長の講演



Durongkaverroj科学技術大臣からトロフィーを授与される中川館長（右）



企画展示を案内する様子

## 「院生・若手研究者のための英語論文執筆セミナー」を開催

「院生・若手研究者のための英語論文執筆セミナー」を人文社会科学系編、生命科学系編（2回）、理工学系編の計4回開催し、大学院生・博士研究員（ポスドク）を中心に、英語論文指導の体系的な知識に関心をもつ教員など計424名の参加者がありました。

11月12日（木）に、社会科学実験研究センター、大学力強化推進本部URAステーション、附属図書館の共催（文学研究科後援）で、人文社会科学系編の英語論文執筆セミナーを開催しました。このセミナーでは、SAGE Publications アジア・太平洋地域エグゼクティブディレクターであるRosalia Da Garcia氏による英語論文執筆に関するレクチャー、及び最新の人文社会科学系論文出版状況の世界的動向についての講演が行われました。また、結城雅樹社会科学実験研究センター長から、新たに設けられた本学大学院生を対象とした論文賞についての説明がありました。

11月25日（水）・26日（木）の両日

には、URAステーション、附属図書館の共催で、生命科学系編、理工学系編の英語論文執筆セミナーを開催しました。このセミナーでは、カクタス・コミュニケーションズ株式会社の西川マリ氏による「アクセプトされる英語論文の書き方」についての講演が行われました。

これらの講演以外に全ての回で、附属図書館からは、オープンアクセスの基礎知識、及びそれに関する図書館サービスについて、URAステーションからは、11月に開始した若手研究者

向け論文校閲費支援事業についての説明を行いました。

講演に関して活発な質疑応答があったこと、セミナー終了後も講師へ質問する参加者が列をなす様子から、院生、若手研究者における英語論文執筆に対する関心の高さがうかがえました。また、アンケート結果では95%以上の方から「今後の論文執筆に役立つ知識が得られた」という回答を得ました。

（附属図書館）



12日の人文社会科学系編の様子  
（人文・社会科学総合教育研究棟W103）



26日の理工学系編の様子（理学部大講堂）

## 附属図書館で「救命導入（AED）講習会」を開催

附属図書館では、12月14日（月）・15日（火）の2日間、札幌市北消防署幌北出張所の所員4名を講師に迎え、本館4階大会議室において図書館職員を対象にした救命導入（AED）講習会を開催しました。

14日（月）は29名、15日（火）は

34名、合計63名の参加があり、講師よりAED（自動体外式除細動器）の使用法の説明の後、人体モデルを使って倒れている人への心臓マッサージやAED使用の実践訓練を行いました。

附属図書館は本館2階総合カウンター前と北図書館2階カウンター前に

AEDを設置し、札幌市が実施している「さっぽろ救急サポーター事業」にも参画しています。

（附属図書館）



講師の消防署員による説明



実践訓練の様子

## 博士學位記授与

12月25日（金）に本学大学院研究科等の所定の課程を修了した課程博士は23人、及び本学に学位論文を提出してその審査、試験等に合格した論文博士は3人でした。

なお、被授与者の氏名と論文題目等は次のとおりです。

(学務部学務企画課)

### 課程博士

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者		博士論文名
	氏名		
博士（文学）	さか 坂	とし ひろ 敏 宏	Max Weberと科学：価値自由と合理性の世界観 主査：准教授 田口 茂
	ふか 深	やま よう へい 山 洋 平	初等トポス理論の射程：集合・圏・論理 主査：特任教授 中戸川 孝治
博士（学術）	まつ 松	した たか し 隆 志	ナショナルな欲望の回帰：1990～2000年代のロシア・ポストモダニズム文学の変容 主査：特任教授 望月 哲男
博士（医学）	わた 渡	なべ とし ゆき 邊 俊 之	抗リン脂質抗体陽性全身性エリテマトーデス患者に対するスタチン製剤の血栓症抑制効果とその機序の解明 主査：教授 有賀 正
博士（獣医学）	おお 大	すが たつ ゆき 菅 辰 幸	Application of evaluation of left atrial phasic function via time-left atrial area curve analysis based on two-dimensional speckle tracking echocardiography in canine heart disease (2D Speckle Tracking 心エコー図法による時間-左心房断面積曲線解析を用いた左心房機能評価の犬心疾患への応用) 主査：教授 滝口 満喜
	ひ お の 日 尾 野	たか ひろ 隆 大	Studies on the ecology and mechanism of interspecies transmission of avian influenza viruses (鳥インフルエンザウイルスの生態および異種宿主間伝播機構に関する研究) 主査：教授 迫田 義博
博士（情報科学）	サ エ ル Thaer ム ス タ フ ァ デ ィ ー ブ Moustafa Dieb		Framework for Experimental Information Extraction from Research Papers to Support Nanocrystal Device Development (ナノ結晶デバイス開発支援のための論文からの実験情報抽出フレームワーク) 主査：准教授 吉岡 真治
博士（工学）	ウー 呉	モウ コウ 孟 鴻	Cooperative Object Transportation With Multiple Humanoid Robots (複数ヒューマノイドロボットによる協調物体搬送) 主査：教授 近野 敦
博士（水産科学）	なか 仲	むら やす ひで 村 康 秀	Studies on Phylogeny and Ecology of Phaeodarians (フェオダリア類の系統分類と生態に関する研究) 主査：教授 矢部 衛
	ほり 堀	もと たか のり 本 高 矩	キタオットセイのロシア繁殖群における非繁殖期の分布と摂餌生態 主査：教授 綿貫 豊
	オウ 王	ハン 姪	Biochemical and molecular biological study of major yolk proteins (MYPs) in sea urchin (ウニの主要卵黄タンパク質MYPsに関する生化学および分子生物学的研究) 主査：教授 足立 伸次
博士（理学）	エム デ イ モ タ レ ブ Md. Motaleb ホ サ イ ン Hossain		Sediment-Loading Processes in a Forested Catchment Influenced by Slope Failure (斜面崩壊を伴う森林流域の土砂流出機構) 主査：特任准教授 知北 和久
	デ イ サ ナ ヤ ケ Dissanayake ム デ イ ヤ ン セ ラ ゲ Mudiyansele ウ プ ル ア ジ ヤ ン タ Upul Ajantha ク マ ラ Kumara プ レ マ ラ タ ナ Premarathne		Basin and petroleum system modeling of the northern Mannar Basin, offshore Sri Lanka (スリランカ沖北部マナー堆積盆地の堆積盆石油システムモデリング) 主査：教授 鈴木 德行



博士 (農学)	コウ 高	ケイ 慧	チン 琛	Growth and Development of Organic Agriculture in Contemporary China:A Study from the Producers' Perspectives (中国における有機農業の展開-生産主体の視点から-)	主査:准教授 朴 紅		
	さ 佐	とう 藤	ひろ 広	ゆき 行	北日本産イネ科ノガリヤス属の分類学的研究 主査:教授 高橋 英樹		
博士 (生命科学)	いま 今	い 井	み 美	さ 沙	Study on three dimensional morphogenesis of epithelial cells on the viscous substrata:Involvement of substrate deformation induced by cellular traction forces (培養基質の粘性が上皮細胞集団の3次元形態形成に与える影響に関する研究:基質把握力による培養基質の変形の関与) 主査:教授 芳賀 永		
博士 (教育学)	ボク 朴	ジン 仁	テツ 哲	朝鮮人「満州」移民のライフヒストリー (生活史) に関する研究-移民体験者たちへのインタビューを手掛かりに-	主査:特任教授 竹本 幸博		
博士 (工学)	か 上	とう 遠	の 野	か 一	ひろ 広	Charge Disproportionation State in Organic Conductors (有機導体における電荷不均化状態の研究) 主査:准教授 市村 晃一	
	おか 岡	だ 田	よし 義	ひろ 浩	高速操舵走行する自動車に作用する空気力について 主査:教授 大島 伸行		
	サ Saran	ラン	キ ケeratihattaya-	ラ ハ	ツ タ	ヤ korn	Muscle Activating Force Detection Using Surface Electromyography (表面筋電位を用いた筋活動力検出に関する研究) 主査:教授 梶原 逸朗
	おお 大	わ 脇	けい 慶	た 多	チューリッヒ市建築賞に見る自治体主体の建築賞に関する研究-市町村による優れた都市景観/空間の創造に向けた理念・手法について- 主査:准教授 小澤 丈夫		
博士 (理学)	よこ 横	くら 倉	せい 聖	や 也	Studies on Transport Properties of Single Crystal Transistors Based on Mixed-Stacked Charge-Transfer Complexes with Disorder or Nonuniformity (構造の乱れや不均一性を持つ交互積層型電荷移動錯体を用いた単結晶トランジスタの輸送特性に関する研究) 主査:教授 武田 定		
博士 (工学)	かわ 川	しま 島	あ あ	き 祥	Study on Synthesis and Photo-functionalization of Magnetic Semiconductor Lanthanide Nanocrystals (磁性半導体希土類ナノ結晶の合成と光機能化に関する研究) 主査:教授 安住 和久		

論文博士

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者		博士論文名						
	氏名								
博士 (文学)	た 田	じま 島	よし 佳	や 也	近世北海道漁業と海産物流通 主査:准教授 谷本 晃久				
博士 (環境科学)	ミ Mir Md.	ル ム	エ ディ	モ ザ	マ ム	ル Mozammal	ホ ホ	ク ク	Geochemical study on low molecular weight dicarboxylic acids and related compounds in the marine aerosols from the Pacific Ocean (太平洋エアロゾル中の低分子ジカルボン酸と関連有機物に関する地球化学的研究) 主査:特任教授 河村 公隆
博士 (農学)	の 野	なか 中	いと 最	こ 子	高温環境下におけるホルスタイン種育成雌牛のエネルギー代謝と体蓄積配分に関する研究 主査:特任教授 近藤 誠司				

## ■レクリエーション

### 方円会が学生囲碁部との交流会を開催 —全日本大学囲碁選手権大会の壮行会を兼ねて—

12月12日（土）、本学方円会（教職員囲碁同好会）が学生囲碁部との交流会を行いました。この会は毎年12月中旬に方円会が主催するもので、年末に東京の日本棋院で開かれる全日本大学囲碁選手権大会の壮行会を兼ねています。

今年の参加者は学生囲碁部14名、教職員10名の計24名でした。対局に先立つ自己紹介で、杉本昌義部長（農学部2年）をはじめレギュラー陣から大会で上位を狙う抱負が語られ、今年こそは3位入賞を果たしてくれるのではないかと期待が膨らみました。また級位レギュラー以外の学生も各自目標を持って精進している様子で、部全体がとても良いムードであると感じました。教職員からも自己紹介があり、医学研究科の高山芳幸八段からは全員を代表して激励の挨拶がありました。

教職員側が若干少なかったため、高段者は1対1の真剣勝負、低段者と級位者は教職員による多面打ちとなりました。毎年苦勞するのが教職員と学生との手合割（ハンデキャップ）です。アマチュア囲碁界の段級は自己申告制で、一般に学生は自己評価が厳しく社会人は甘い傾向があるため、お互いの自己申告に基づく手合割は教職員にとって不利になりがちですが、教職員は少しでも彼らの飛躍の踏み台になれば良いと思いながら対局に臨んでいました。

平成27年の方円会活動は、秋季の知事杯職場対抗戦で悲願の初優勝を成し遂げるなど実りの多いものでした。平成28年も学生囲碁部ともども充実した年になることを祈っています。

（北大方円会）



対局風景



高段者同士の真剣勝負

## ■諸会議の開催状況

### 役員会（平成27年12月7日）

議案・平成27年度中期目標達成強化経費第二次決定事業について

協議事項・コチュテル・プログラムの導入とダブル・ディグリー・プログラムの見直しについて  
・諸規則の一部改正について

報告事項・平成27年度冬季の節電対策について  
・障害者の雇用状況等について

### 教育研究評議会（平成27年12月16日）

議題・コチュテル・プログラムの導入とダブル・ディグリー・プログラムの見直しについて

・諸規則の一部改正について  
報告事項・全学運用教員の措置について  
・第3期中期目標期間における部局等の中期計画の作成について  
・寄附講座等の設置及び更新について  
・第11回北海道大学・九州大学合同活動報告会について

---

**役員会**（平成27年12月24日）

議案・コチュテル・プログラムの導入とダブル・ディグリー・プログラムの見直しについて

- ・ 諸規則の一部改正について
- ・ 共同プロジェクト拠点の認定について
- ・ 平成27年度教育研究支援業務総長表彰について

報告事項・平成27年度補正予算について

---

※規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しております。

## ■ 学内規程

---

### 北海道大学情報基盤センター規程の一部を改正する規程

（平成27年12月10日海大達第268号）

平成27年10月1日付けで、北海道大学教育情報システム（通称：ELMS）の学内共同利用に係る業務について、高等教育推進機構オープンエデュケーションセンターが行うこととなり、情報基盤センター教育情報システム学内共同利用委員会を廃止することとなったことに伴い、所要の改正を行ったものです。

---

### 北海道大学における講座等に関する規程の一部を改正する規程

（平成28年1月1日海大達第1号）

平成28年1月1日付けで医学研究科医学専攻の寄附講座を廃止することに伴い、所要の改正を行ったものです。

---

### 北海道大学大学院通則の一部を改正する規則

（平成28年1月1日海大達第2号）

### 北海道大学学位規程の一部を改正する規程

（平成28年1月1日海大達第3号）

博士後期課程並びに医学研究科、歯学研究科、獣医学研究科及び生命科学院臨床薬学専攻の博士課程において、外国の大学の大学院と共同で研究指導を行う教育プログラムを実施できることとするに伴い、所要の改正を行ったものです。

---

### 国立大学法人北海道大学創成研究機構規程等の一部を改正する規程

（平成28年1月1日海大達第4号）

平成28年1月1日付けで、創成研究機構の組織を改めることに伴い、所要の改正を行ったものです。

---

### 北海道大学履修証明プログラムに関する規程の一部を改正する規程

（平成28年1月1日海大達第5号）

履修証明プログラムの廃止に係る要件及び手続きを定めることに伴い、所要の改正を行ったものです。

---

### 国立大学法人北海道大学個人情報管理規程の一部を改正する規程

（平成28年1月1日海大達第6号）

平成27年8月25日付けで「独立行政法人等の保有する個人情報の適切な管理のための措置に関する指針について」が改正されたこと、及び「行政手続における特定の個人を識別するための番号の利用等に関する法律」により、平成28年1月から個人番号の利用が開始されることに伴い、所要の改正を行ったものです。

---

## ■ 研修

### 平成27年度北海道地区国立大学法人等学生支援担当職員SD研修

開催期間：平成27年12月3日・4日

開催場所：高等教育推進機構大会議室

研修目的：学生指導、学生支援及び学生サービス業務を円滑かつ適正に行うために必要な基本的知識、対応能力等を習得することにより、学生支援担当職員としての能力の向上を図ることを目的とする。



徳久治彦理事・事務局長の挨拶



講義の様子  
(株式会社アムリプラザ 後藤ひろみ講師)



講義の様子 (教育学研究院 松田康子准教授)



出口寿久学務部長から修了証書の授与

(学務部学生支援課)

### 研修名：平成27年度法人文書管理・個人情報保護に関する研修会

開催期間：平成27年12月22日

開催場所：百年記念会館大会議室

研修目的：法人文書管理・個人情報保護に関する事務を担当する事務職員に対して、必要な基礎知識を習得させるとともに、各職員の意識及びスキルの向上に資することを目的とする。



講義「法人文書管理研修」  
(井上高聡大学文書館准教授)



講義「個人情報保護研修」  
(齋藤隆広弁護士 (齋藤祐三法律事務所))

(総務企画部総務課)

## 表敬訪問

### 国内

年月日	来訪者
27.12.17	JR北海道ホテルズ株式会社 代表取締役社長 石見 誠嗣 氏



JR北海道ホテルズ株式会社  
代表取締役社長 石見 誠嗣 氏（左側）

（総務企画部広報課）

### 海外

年月日	来訪者	来訪目的
27.12.4	同済大学（中国）Gang Pei 学長	両大学の交流に関する懇談
27.12.8	ブレーメン大学（ドイツ）Yasemin Karakasoglu 副学長	両大学の交流に関する懇談
27.12.10	アバディーン大学（イギリス）Seth Kunin 副学長	両大学の交流に関する懇談
27.12.21	ソウル大学校（韓国）Cheol-Soo Lee 企画処長	両大学の交流に関する懇談



同済大学（中国）  
Gang Pei 学長（前列左から2人目）



ブレーメン大学（ドイツ）  
Yasemin Karakasoglu 副学長（前列右から2人目）



アバディーン大学（イギリス）  
Seth Kunin 副学長（左側）



ソウル大学校（韓国）  
Cheol-Soo Lee 企画処長（前列左から2人目）

（国際本部国際連携課）

# ■人事

平成27年12月6日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【講師】 (辞職)	田 島 敏 広	大学院医学研究科講師

平成27年12月16日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【助教】 大学院理学研究院助教	福 岡 脩 平	採用

平成27年12月31日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【助教】 (辞職)	大 西 なおみ	人獣共通感染症リサーチセンター助教
【技術職員等】 (辞職)	浅 野 理 更 石 垣 希 恵 岡 本 美 帆 合 田 晴 奈 高 松 実希子 春 名 優 本 江 由 実	北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師

平成28年 1 月 1 日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【総長補佐】 (期間：平成29年 3 月31日まで)	高 橋 彩	国際本部留学生センター教授
【教授】 大学院法学研究科教授 大学院歯学研究科教授 大学院情報科学研究科教授 大学院理学研究院教授 大学院理学研究院教授 (転出) 北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科教授	WELCH DAVID ANDREW 箕 輪 和 行 川 村 秀 憲 朝 倉 政 典 本 多 尚 文 敷 田 麻 実	採用 大学院歯学研究科准教授 大学院情報科学研究科准教授 大学院理学研究院准教授 大学院理学研究院准教授 観光学高等研究センター教授
【准教授】 大学院医学研究科准教授 大学院医学研究科准教授 大学院農学研究院准教授	泉 剛 倉 島 庸 東 山 寛	大学院医学研究科講師 大学院医学研究科助教 大学院農学研究院講師
【講師】 大学院医学研究科講師 大学院農学研究院講師 北海道大学病院講師	山 田 雅 文 加 藤 英 介 井 口 晶 裕	北海道大学病院講師 大学院農学研究院助教 北海道大学病院助教

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
<b>【助教】</b> 大学院理学研究院助教 大学院理学研究院助教 大学院工学研究院助教 北海道大学病院助教 北海道大学病院助教 遺伝子病制御研究所附属感染癌研究センター助教 国際連携研究教育局助教	石 垣 侑 祐 高 敏 吉 岡 翔 太 石 津 桂 松 井 雄一郎 間 石 奈 湖 PENG HAO	採用 採用 採用 採用 大学院医学研究科助教 採用 採用
<b>【専門職 (学術)】</b> 国際本部学術主任専門職	石 井 治 恵	国際本部講師
<b>【補佐】</b> (出向) 帯広畜産大学経営管理部総務課課長補佐	勘 原 和 彦	研究推進部研究振興企画課係長
<b>【係員】</b> 総務企画部企画課 財務部調達課 学務部学務企画課 研究推進部研究振興企画課 医学系事務部総務課 医学系事務部会計課 医学系事務部保健科学研究院事務課 環境科学事務部 北海道大学病院総務課 低温科学研究所	北 原 友 梨 堀 愛 菜 酒 井 広 西 村 美 里 石 田 千 織 松 川 晶 子 田 原 啓 司 上 井 壯 輔 梶 山 美 紀 江 崎 公 二	採用 採用 採用 採用 医学系事務部保健科学研究院事務課 採用 環境科学事務部 採用 北海道大学病院管理課 採用

新任教授紹介

平成28年1月1日付



法学研究科教授に

David Andrew Welch 氏

法学政治学専攻政治学講座

専門分野  
国際政治



歯学研究科教授に

箕輪 和行 氏

口腔医学専攻口腔病態学講座

専門分野  
頭頸部画像診断学



情報科学研究科教授に

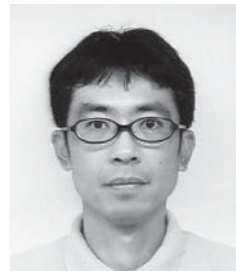
川村 秀憲 氏

情報理工学専攻  
複合情報工学講座

生年月日  
昭和48年5月3日

最終学歴  
北海道大学大学院工学研究科博士後期課程修了（平成12年3月）  
博士（工学）（北海道大学）

専門分野  
人工知能，マルチエージェント，観光情報学



理学研究院教授に

朝倉 政典 氏

数学部門数学分野

生年月日  
昭和46年11月16日

最終学歴  
東京大学大学院数理科学研究科博士課程修了（平成11年3月）  
博士（数理科学）（東京大学）

専門分野  
数論幾何学



理学研究院教授に

本多 尚文 氏

数学部門数学分野

生年月日  
昭和38年12月7日

最終学歴  
東京大学大学院理学系研究科第一種博士課程修了（平成3年3月）  
博士（理学）（東京大学）

専門分野  
代数解析学



## 訃報

名誉教授 <sup>きのした</sup>木下 <sup>しんいち</sup>晋一 氏  
(享年75歳)



名誉教授 木下晋一先生が平成27年8月27日に逝去されました。先生は昭和38年3月大阪大学工学部醗酵工学科をご卒業され、その後同大学大学院工学研究科修士課程・博士課程に進学され、同43年3月に工学博士の学位を大阪大学より授与されております。博士課程修了後、すぐに博士研究員としてミネソタ大学工学部化学工学科に留学され、昭和45年7月に帰国された後、

大阪大学工学部助手に採用され、同53年には同助教授に昇任されました。北海道大学には、平成3年11月に工学部合成化学工学科の教授として赴任され、13年間にわたり本学の教育と研究指導に尽力されました。平成16年3月に定年により退官されるまで、先生は、生物工学の多方面の分野で数多くの業績を挙げられましたが、微生物の生産する新規酵素の発見などを通じて、環境浄化における生物工学的アプローチに関する研究で先駆的な成果を次々と発表され、今日のこの分野の発展の基礎を築かれてこられました。

先生は国際貢献にも積極的に取り組み、東南アジアを中心とする国際交流プロジェクトに積極的に参画され、大阪大学生物工学国際交流センターの教授も併任され、積極的に留学生を受け入れ、生物工学に関わる研究者の人

材育成にご尽力されました。学会でも長きにわたり日本生物工学会理事として重責を果たされ、我が国のバイオテクノロジーのリーダーの一人として大きな足跡を残されました。

また、学外においては、資源調査会専門委員、学術審議会専門委員、日本生物工学会理事等も歴任され、生物工学の発展に貢献されました。

北海道大学では応用生化学研究室を主宰され、その学識のみならず包容力とお人柄を以って、よき指導者として時には厳しく本学の学生のみならず多くの後進の育成に尽力されてこられました。

先生の長年にわたるご貢献に改めて感謝し、ここに謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(工学院・工学研究院・工学部)

名誉教授 <sup>つのがい</sup>角皆 <sup>しずお</sup>静男 氏  
(享年77歳)



名誉教授 角皆静男氏は、平成27年12月8日にご逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

同氏は、昭和13年8月2日静岡県に生まれ、同36年3月東京教育大学理学部化学科卒業し、同41年3月同大学大学院理学研究科博士課程を修了後、同年4月に北海道大学水産学部講師とな

り、同46年10月助教授に昇任、同56年4月教授に任ぜられ、分析化学講座に所属し、教育研究活動に従事されました。

その後、平成6年4月に新設された地球環境科学研究科大気海洋圏環境科学専攻教授に配置換となり、教育研究活動に従事され、同14年3月北海道大学を定年退職、同年4月北海道大学名誉教授の称号を授与されました。

この間、先生は、水産学部在職時には、放射性核種や化学物質を用いた大気・海洋・海底を通しての物質循環の研究、地球環境科学研究科在職時には、二酸化炭素による地球温暖化とそれに伴う海洋における生物地球化学的变化に関する研究に従事してきました。同氏の研究は、国内外で高い評価を得ており、昭和59年3月に日本海洋

学会賞、平成2年9月には日本地球化学会賞を受賞しています。

同氏は、学内では学部内外で諸委員を務められたほか、学外においても、日本学術会議地球化学・宇宙化学研究連絡委員会委員、日本海洋学会会長等を務められ、地球環境科学に関する同氏の卓越した知見をもって、学術研究の発展に大きく貢献されました。同氏の学術の進展及び教育等への貢献は高く評価され、平成20年3月には日本海洋学会宇田賞を授与されています。

同氏の長年にわたるご貢献に改めて感謝し、ここに謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(環境科学院・地球環境科学研究院)

よしだ ひとし  
**名誉教授 吉田 仁志 氏**  
 (享年88歳)



名誉教授 吉田仁志氏は、平成27年12月11日逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

先生は、昭和2年5月8日北海道上川郡名寄町に生まれ、同28年3月に北海道大学理学部化学科を卒業、引き続き同大学大学院に進学し、同33年7月に同大学理学部化学科助手に任じられました。その後昭和37年5月には同大学理学部助教授、同49年5月に教授に昇任されました。平成3年3月停年により退職、同年4月に北海道大学名誉

教授の称号を授与されました。この間、昭和53年から1年間はカナダ国立研究機構において誘導プラズマ発光分析法に関する研究に従事されています。

先生は、永年にわたって分析化学の教育・研究に努められ、水溶液中に存在する微量成分のための高感度、高選択的分析手法の開発と分離化学に関する研究に取り組まれてきました。初期の溶液噴霧発光分光分析法の開発に関する研究から始まり、有機試薬を用いる無機イオンの迅速光度定量に関する研究、その後の細管等速電気泳動、温度滴定、ボルタンメトリーなど研究領域は多岐にわたっています。特に、等速電気泳動法に関する研究では、錯形成やイオン対形成反応によりイオンの有効移動度を精密に制御する方法を開発され、化学的性質が酷似しているためにその分離が極めて困難とされていた14種のランタノイドイオンの一斉分離を達成しています。この成果は分離化学における錯形成平衡適用の典型的

成果として外国のテキストにも紹介されるなど国内外から高く評価されるとともに、分析化学の発展に貢献するところ顕著であるとして昭和63年日本分析化学会から学会賞が授与されています。

学内では、入試委員会委員、評議員等を歴任された他、昭和64年1月から2年間教養部長として教養部改革に取り組まれました。学外でも、日本分析化学会北海道支部長等の他、昭和63年には同学会副会長として第37年会を札幌で成功裡に開催しました。

先生はまた、教育・研究を通じて多くの人材を育成され、先生の教えを受けた多くの方々が現在大学や研究所、教育界で活躍しています。

ここに謹んで先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(理学院・理学研究院・理学部)

まるかわ けんざぶろう  
**名誉教授 丸川 健三郎 氏**  
 (享年78歳)



名誉教授 丸川健三郎先生が平成27年12月19日に逝去されました。先生は昭和34年3月京都大学理学部物理学科をご卒業、同36年3月同大学院修士課程を修了され、同37年3月に東京大学物性研究所助手に着任されました。その後、昭和42年1月に京都大学より理学博士の学位を授与され、同年8月に北海道大学工学部助教授に着任されま

した。さらに、昭和63年4月から応用物理学科X線粒子線講座（その後、結晶物理学分野）教授として、平成12年3月に定年退官されるまで、教育と研究指導に尽力されました。

この間、先生は結晶物理学、金属物性学において数多くの業績を挙げられ、この分野の発展に寄与されました。先生のご業績は、結晶における格子欠陥と相変態の研究に大別できます。格子欠陥の分野では、電子顕微鏡やX線トポグラフなどを用いた転位の「新しい評価法」の開発、また「転位の運動」に関する研究などで大きな業績を挙げられました。特に、転位論に基づく金属強度理論の研究は先生のライフワークで、退官後にも多くの論文を発表されたことが特筆されます。また、相変態の分野では、形状記憶とマ

ルテンサイト変態の関係について研究を展開され、転位や短距離規則などの新しい観点を導入され、内外から注目されました。

一方講義においては、丁寧な話し方で理路整然と講義を行い、また質問には明快な回答をされておりました。そのためか、研究室も人気があり、多くの学生で手狭になった研究室で活発な研究が行われ、優秀な卒業生が育っていきました。お仕事の傍ら、先生はクロスカントリースキーを趣味とされており、スキー大会の順位表にお名前を何度かお見かけしました。このように先生は、余暇でも大きな業績を残されました。

ここに先生のご冥福をお祈りします。

(工学院・工学研究院・工学部)

## 編集メモ

---

●「リテラポプリ特別号」を発行しました。昨年8月に文部科学事務次官に就任された本学OBの土屋定之氏と山口佳三総長の対談記事を掲載しています。ホームページからぜひご覧ください。

◆ <http://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/litterae.html>

●NHK「新世代が解く！ニッポンのジレンマ@北海道大学」の公開収録が、3月5日（土）に本学人文・社会科学総合教育研究棟で行われます。詳細については、後日ホームページでご案内する予定です。



2016.12 留萌本線 増毛～箸別（増毛町）

## 北の鉄道風景 34 日本海沿いのローカル線

北海道で列車の車窓から日本海を望むことができるのは、函館本線の小樽築港～銭函、留萌本線の留萌～増毛、宗谷本線の抜海～南稚内の3路線・区間のみである。これらのうち、諸設備の老朽化や乗客の減少による大幅な赤字などを理由に、留萌本線の上記区間が今年度中に廃止されることになった。北海道新幹線の新青森～新函館北斗の開業と引き替えに、

今後、留萌本線の他にも多くのローカル線の廃止が進められていくことになるのだろうか。新幹線が札幌に延伸する頃には、道内のローカル線は殆ど残っていないのかもしれない。そうならないことを願いつつ、この写真を新春の留萌本線で撮影した。

情報科学研究科 准教授 山本 学

北大時報 ① No.742 平成28年1月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL：(011) 706-2610 / FAX：(011) 706-2092 / E-mail：kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。http://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html